けいおん！　大切なモノを見つける方法

タローボー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
けいおん！　大切なモノを見つける方法

【Ｎコード】
Ｎ５１４７Ｘ

【作者名】
タローボー

【あらすじ】
それは目に見えないけれど、暖かくて、優しくて、持っているだけで幸せな気持ちになれる、そんな夢のような。それでいて、ありふれていて誰しもが持っている。そんな大切なモノ。
んなモンあるワケねーだろって人も、もうとっくの昔から持ってるよって人も、そんなん探してるヒマあったら勉強か仕事しろって人も。ちょっとだけ心を優しくして、俺の長話に付き合ってくれると嬉しいね。

プロローグ

「なぁ、父さん」

俺がそう声をかけると父さんは、どしたん？と視線を変えずに返事をした。カチャリと父さんが洗い終わった食器をおれに渡してくる。

「やっぱり俺……あの高校入るのヤメる」

俺は台所で父さんの隣に立ち、食器を拭きながら、ずいぶん前から腹に仕舞っていた気持ちを捻り出す。父さんは何も言わず、ただ食器を洗い続ける。

「新しい家のいっちゃん近いトコの普通の高校でいいよ、情けないけど授業料免除取り消しになっちゃったし。通学に時間食われんのヤダしなー」

俺は努めておどけた風に言った。自分に対して気を遣って欲しくないからだが、それを聞いた父さんは少し困った様に食器を洗う手を止め、そうか、とだけ言った。

「そ、それに俺さ、姉ちゃんとかの大学での話聞いてると自分も大学まで行きたくなっちゃってさ、……それにさっ」

言えば言うほど父さんに気を遣わせてしまっているのが良く分かる。父さんはあたふたしている俺の方を向き、顔を上げた。

……いつもしてニコニコ明るい親。そんな人がひどく悲しそうな顔をして、俺を見ていた。正確には俺のギプスがまだ取れていな

い右足を。

「……無理すんなや、オマエの好きなようにやったらええんやぞ？」

１５年間俺はこの声を聞いて育ってきた。この方言丸出しの温かい声を聞くとホッとするはずなのだが、どうしてだかこの時の俺の耳には機械みたいに平坦な音に聞こえた。ムリしてないよマジで大丈夫だから、という自分の声もまるでロボットみたいだ。

「今１番ツライんはオマエやろぉが。ホンマにこの子は……そんな顔して」

そんな顔ってどんな顔だよ、と窓に映った自分の顔を見る。そこにはあとひと押しされたら泣きベソをかき出すガキの顔が映っていた。

……俺だった。

俺が初めてバスッケットボールをついたのは幼稚園を卒業してハナたらしながら小学校に入学したばかりの頃だった。バスケを始めた理由はしょーもなく、確か姉ちゃんに遊んでもらいたい、とかなん

かそんな感じだったと思う。４つ上の姉は当時小学校のバスケクラブに入っており、ロクに構ってくれなかった、だから俺もとガキ丸出しの考えで姉ちゃんにくっついてクラブに入った。
そこからは一直線だった。日が暮れるまで友達と茶色いボールをダムダムついて、学校や公園で毎日遊んだ。姉ちゃんは中学に入ると同時に吹奏楽部に入部しバスケをやめてしまい、少し寂しく思ったが自分までやめるなんて発想は１ミリも浮かばなかった。そのうち学校のクラブだけでなくミニバスのチームにも入り、この頃にはもう完全にバスケの魅力に取り憑かれており、小遣いのほとんどをバッシュ代に当ててハイペースで履き潰していた。
中学に上がると当然のようにバスケ部に入り、生活の中心が部活になっていた。在学していた中学校のバスケ部が全国区なことも拍車をかける一因になっていたと思う。
中３の夏にはウチのチームは全国大会で３位にもなった。これは奇跡としか言いようがないが、俺はＭＶＰとは別に選ばれる特別賞――ベスト５のひとりに選ばれ、いくつかの高校からスカウトも受けた。そのうちの一校が偶然父親の転勤先に近かったので、その推薦の話に飛びついたのだ。長年のチームメイトたちとお別れすることは滅茶苦茶寂しかったが、男手ひとつで俺を育ててくれた父さんに負担は掛けたくなかった。

それでも俺は幸せだった。高校生になっても大好きなバスケができる。そしてもっと上手くなって、夢のまた夢だけど田臥選手みたいにアメリカに行ってＮＢＡプレイヤーになりたいと人生の目標にしていた。
　本当の本当に幸せだった。ずっとこんなささやかで汗臭いモンだけどおれにとっては最高な幸せが続くと信じて疑わなかった。
そんなモン、一発の出来事でブッ壊れるということをおれは知らなかったんだ。

交通事故だった。
雪がしんしんと降る冬のことだった。

新しい家と新しい学校、春に引っ越す予定の新しい町に俺は家族と一緒に下見に来ていた。新居の様子を見に行く父親と妹と別れて、これから入学する予定の高校を見学しに行く最中のことだった。
俺が浮かれていて不注意だったのかもしれないし、車の運転手が急いでいたからかもしれないし、路面が少し凍結していたからかもしれないし、他にも原因があったからかもしれない。

俺は右脚を前輪後輪合わせて2回、ワゴン車にガッツリ轢かれた。
後日のお医者さんの言葉は今でも夢に出てくる。

『本当に残念だけど、キミはもう走れない。脊髄損傷ではないけど右脚に障害が残る。最悪、車椅子生活かもしれないな』

多分こういう風にハッキリと患者に言うことが医者の仕事のひとつなんだろうと後々分かったが、その時の俺はその医者をブン殴ってやることしか頭になかったんだろうな。

こうして全てが終わった。
大げさでもなく比喩表現でも何でもなく、全部終わってしまった。
高校の推薦や授業料免除の話は当然なくなり、他の高校のスカウトの電話もパッタリこなくなった。
そして何より、バスケができなくなってしまった。ドリブルもシュートもパスも。みんなと一緒にコートに立ってゲロ吐くまで、ランントレしたり鬼みたいな監督にマジで怒られたり試合に勝って喜んだり試合に負けて落ち込んだり、笑い合ったりすることがもう一生できないらしい。

「……俺もう寝るな、父さん」

俺はこれ以上いると本当に泣き出しそうになったので、オヤスミと言って部屋に戻ろうとした。
立てかけてあった松葉杖を手に取り、台所を出たところで後ろから父さんの声がした。

「見つかるぞ」

足を止めずに耳を傾ける。

「バスケみたいな大切なモノが、オマエにもいつかきっと見つかるて」

俺は部屋に戻るとベッドに顔から倒れこんだ。松葉杖を床に放り投げ、ゆっくりと天井を眺める。
……バスケみたいな大切なモノ？

「んなモンあるワケねぇだろ」

そう口にした瞬間目頭が熱くなり、涙で天井がぐにゃりと歪む。
喉から漏れてくる嗚咽を噛み殺しながら、布団をかぶる。
明日なんて一生来なけりゃいいと、俺はガキみたいに布団の中で丸まりながら、そう思った。

第1話　正しい学校を選ぶ方法

「さっくらーがおかー、こーこー♪」

そう、桜ヶ丘高校。

俺はこの春、この学校の生徒――高校生になった。

「――ああ、さっくらーがおかー、こーこー♪」

ついさっき入学式で覚えたばかりの校歌を口ずさみながら、俺は自分のクラスの教室を探しながら校舎を歩いていた。

生まれて初めて締めたネクタイが妙にくすぐったく、落ち着きなく首回りをいじる。買ったばかりの真新しい上履き。ちょっと裾が長めのスラックス。体に馴染んでいないブレザー。下ろし立ての制服と窓の外から見える春の象徴である桜たちが、高校生になったということを実感させる。

高校なんて中学の延長だろ、とかそんな冷めたことを思っていたけどそんなことはなく、少しは大人に近づいたんじゃないかと錯覚してしまう。

「イイ雰囲気の学校じゃん」

桜ヶ丘高校は全部の校舎ではないが大半が木造校舎で占められている。そのせいか変に気取ったところがなく、特別に厳しい校則も進学意識もなく、好感が持てるような気がした。おまけに数年前まで女子高だったこの学校はなかなかに女子生徒の数が多く、我なが

ら邪だなぁと思いつつも健全な男子である俺は嬉しく思う。
最高だ、この学校に入ってよかったな、と俺は素直にそう思った。

俺のクラスは1年2組、教室に入ると何人かが無遠慮な視線を寄越してくる。
……そりゃこのトシで杖ついてるヤツいたらちょっと変だよなぁ。
ちなみに比較的に根気よくリハビリを続けていたので右脚の状態はかなり良くなっている。だけどまだ脚に長距離を歩くほどの負荷はよろしくないらしいので杖を持たされている訳だ。まあ学校までそんな距離ないから平気だと思ったんだけど家族の人が持って行けとうるさく心配してくれたので、こうして持ってきている。
ジイさんっぽくて格好悪ぃ、なんて子供っぽいことを考えながら自分の学籍番号に割り当てられた席に着く。
俺は後ろの席の生徒に声をかけることにした。

「よっす。男女比ひでえとか思ってたけど案外そうでもないのな」

こういうとき、ほとんど人見知りしない自分の性格を、俺はけっこう気に入っていたりする。数少ないセールスポイントだな、とか適当なこと考えながら周りを見渡す。

「俺ら含めて１０人はいる――ね」

俺は言いながら声をかけた男子生徒を見る。ぽっちゃりした体格で悪い意味で眼鏡が似合う造形の顔だなぁとか失礼なことを思っていると、手元にあるクラス名簿を凝視していたそいつはゆっくりと俺を見た。

「……まさか、お前もなのか？」

……は？

「お前も桜校にはレベル高い女子がわんさかいるという噂を聞いて桜校を受験したのかっ！？」

そいつは驚きながらもその暑苦しい顔をこちらにずいっと寄せてきた。ヤメテ。

「フッ、まあお前程度の地味なモブキャラが何人いようとこの僕が主人公補正で速攻カノジョつくっちまうがナ」

そのポッチャリくんは、前衛的なデザインのセルフレームメガネをクールにクイっと持ち上げ、ドン引きして喋れないおれに気持ち悪い台詞を言い放つ。何気に地味でモブとかキツいこと言うなや。

入学早々絶対に近づいてはいけないカテゴリーの人間に俺は話し

かけてしまったようだ……。

「だが、モブキャラとはいえこの高校を選んだことは評価してやるぜ」

「いや、今すっごい勢いで入学を後悔してるんスけど、俺……」

こんな学校でマジ大丈夫なんか……！？

「確かにお前の言う通り今年は男子生徒の数は多い。それでも7割以上が女子！数が多いとそれだけカワイイ娘が多くなる、これ真理ナ」

コイツヤバイ……っ。

しかし、結構舌が回って喋るのが好きそうなので、会話を続けてしまう。

「そんな理由で学校選んでるヤツいねーよ！……まぁちょっとは嬉しいけどさ」

俺はポッチャリくんの机に頬杖をつきながらクラス名簿を眺める。

「随分女の子に飢えてるみたいだけど、ひょっとして中学、男子校だったんか？」

「普通に共学だよ悪かったナ、ってかこの辺りで男子中学校とかあるわけねぇだろ。……ん？お前地元民じゃねぇのか？」

「そーだよ。この春に2コお隣の県から引っ越してきた」

「女のためだけに越境してくるとは……、さすがモブキャラ、根性が違うナ」

「親の仕事の都合だよっ！つーか俺どんだけチャラいキャラなんだ！？」

ちょっとムキになって大声でツッコミを入れてしまったので、周りの生徒が数人おれの方に振り向く。

その時――ひとりの女子生徒と目があった。

すぐに目を逸らされてしまったけど、この変態とこんな内容のトークを続けるのもナンなので、その女子生徒に話しかけることにした。

「なぁさ、キミってここらの中学の人なん？」

俺がそう声をかけると、その子はビクリと小さな体を硬直させ、驚いたように目を大きくしてこちらを見た。

「……わ、私のコト？」

うんそう、と言いながら俺は彼女を見る。

その女の子はとても小柄でクリっとした大きな目が、どこか小動物を髣髴とさせる。長い黒髪をツインテールにして縛っている。

……ポッチャリくんじゃないけど、確かにこの学校の女子はレベルが高いよな。すっげー可愛い。

「う、うん。ちょっと遠いけど南中だよ」

「あれ？お前中野じゃね？」

と、ポッチャリくんが食い付く。
知り合いかなんかかな？

「そうだけど……」

「僕も南中なんだヨ。クラス一緒になったこと1回もないけど、お前のこと知ってるぜ！」

喰い気味に中野さんに話しかけるポッチャリくん。
なんで知ってんだよ、と思ったがこいつなら自分と同じ高校に進学する女子ぐらいチェックしてんだろーな。
って中野さんちょっと引いてる引いてる。顔引きつってんぞ！

「中野さん、中学でもコイツこんなんだったんか？」

「わかんないけど、多分そうだと思う」

困ったように答える苦笑いな中野さん。どうやらポッチャリくんが強烈な個性の持ち主であって、同じ中学でも他の人は常識人のようだ。ホッ、一安心。

「俺さ、他県から引っ越してきたからまだ友達はこの変なヤツしかいないんだ。よかったら中野さんも仲良くしてやってな」

俺がそう言うと、中野さんはちょっと恥ずかしそうにモゴモゴしながら、こちらこそよろしく、と言ってくれた。
些細なことだけど、えらく嬉しく感じるのは多分恥ずかしそうにしている中野さんが大層可愛く見えたからだろう。

「入学早々ナンパとは……、さすがモブキャラ、根性が違うナ」

「どこがナンパに見えんだよ……っ」

「いいか、漫画とかだとお前みたいなチャラいモブキャラはフラまくって学校中の女を敵に回した挙句、ドロップアウトして不良になって主人公に倒された後あっさり改心しちゃう程度の小物だぞ？」

「俺どんだけ安い量産型キャラなんだよ！？あとどうせなら最後まで悪役やらせろや！」

こいつはマジで何考えて生きてんだ、漫画読み過ぎ。
そんな俺たちのバカなやり取りが面白かったのか、中野さんは俺たちを見てクスクス笑っていた。硬い表情がようやくだがほぐれてきたらしい。
俺はなんだか嬉しくなって、ワザとらしく、ナンパじゃねえからホントにっ、とオーバーに弁解する。
するとまたポッチャリくんがバカなことを言って俺と中野さんを笑わせてくる。

新しく始まった高校生活。
もうバスケはできないけど。もう昔のように走れないけど。
きっとバスケを忘れて楽しい3年間を送れる。
そう思った瞬間――――

「……あのっ！」

急に後ろから声をかけられたので、振り向く。
直後、それこそ漫画のように俺の顔からサァーと血の気が引いた。

「私のこと、覚えてますか？」

忘れるわけがない。
……平沢、憂。

最悪だ、こんな学校入らなけりゃよかった、と俺は素直にそう思った。

第2話　憂と仲直りする方法

「私のこと、覚えてますか？」

そこに立っていたのは、俺たちと同じ桜校の制服に身を包んだ、栗色の髪をポニーテールにしている可愛らしい女の子だった。

「えっとごめん、どちらサンだっけ？」

ナニ忘れたフリしてんだよ嘘付くなや、俺。

「平沢、憂です。その節は本当にすみませんでした……っ！」

その女の子は顔を強張らせてそう言ってくる。

そんな泣きそうな顔されるとなんかこっちが悪いことしたみたいでバツが悪い。前にも同じ印象感じたなぁ、と思っていると平沢さんはさらに続ける。

「あの数ヶ月前の事故のときにお世話になりました」

「あーあーあー、思い出した。あのときの！」

我ながら大した大根役者っぷりである。ハイハイ完全に思い出したワ、と呟きながらポンと手を打つ。

忘れるワケがない。本当にこの子を思い出さなかった日はなかったし、なんてったって夢にまで出てきた張本人だ。ここまで言うとまるで俺がこの子に一目惚れでもしてしまったような風だが、正直会いたくなかった。むしろ2度とその顔を見たくなかったと言って

も過言ではない。

「平沢さんが謝ることないってばさ。つーかあんな事故、誰が悪いってワケでもないし」

「いえでも、あたしがボーっとしてなければ……。私の所為なんです」

「前にも言ったと思うけど、そんなん言い出したらキリねーよ。気にせんでいいから」

「ごめんなさい、ホントに……」

ごめんなさい、と繰り返す平沢さんを見て、俺はさっさといなくなってもらいたいと切実に願っていた。安物の愛想笑いがいつまでもつかわからない。

「怪我、まだ治ってませんよね？」

平沢さんは机に立てかけてあった杖を一瞥する。

「大丈夫、へーキ。こんなんすぐ治るよ！」

俺は一生治ることのないポンコツの脚をバシバシ叩いた。

「とにかく、なんてお詫びすればいいか……」

「気にせんでいいって」

「私の所為で怪我させちゃったんです」

「もういいってば」

「でも――――」

「だからもういいって！！」

思わず。語気が荒くなる。

……ひょっとして、俺は平沢さんを怒鳴ってしまったのだろうか。

案の定、平沢さんはあからさまに驚き、その大きな瞳から今にも涙がこぼれそうだった。

入学早々八つ当たりで女子を泣かしてしまうとか、俺はどんだけ格好悪くなれば気が済むんだ。

自己嫌悪で死にたくなっていると、丁度タイミングよく担任の教師らしき初老の男性が教室の扉を開いた。周りが雑談を止めていっせいに自分の席に戻り始める。

「ホ、ホラ先生来たぜ、席に戻ろう？な？」

気色の悪い猫撫で声で平沢さんをなんとか席に帰す。

ポッチャリくんが犯罪者を見るような湿度の高い目でこちらを見ていたが、俺は何も言わず教壇に顔を向ける。

「えー、皆さんご入学おめでとうございます。このクラスの担任の――――」

そんな先生のかったるいあいさつを聞いている場合じゃない。

なんで俺はこう優しくできないのだろう。あの子は純粋に謝ってくれただけじゃないか、俺を気遣ってくれただけなのに。アホか俺

は。

「……ハァ」

俺は溜息をつきながら頭を抱える。

もう1度溜息をつき、どうしたもんかと考える。

そんな俺のことを中野さんがじっと見ていることにも気が付かず、平沢さんと初めて会ったときのことを思い出していた。

あの交通事故について誰も悪くないと言ったけれど、実際のところ誰が悪いのかといえばやっぱり俺が悪いんだと思う。

あのとき、運転手の不注意や路面凍結の他に、事故のきっかけとなるある要因があったのだ。それは横断歩道で俺の前を歩いていた平沢さんだった。

はっきりとした意志で助けた訳じゃない。単純に自分が逃げようとした結果だったかもしれないし、本能がそうさせたのかもしれな

い。
俺は突っ込んでくる車に轢かれそうになっていた平沢さんを突き飛ばして助ける形になった。彼女の持っていたエコバッグから食材がぶちまけられたことも覚えている。周りの人間や平沢さんは、それを自己犠牲による美しい救出に見えたかもしれないが、実際はなんでそんなことをしたのか自分でもわからない。
俺がそうしなければ平沢さんは事故の被害者となり、下手したら死んでいたかもしれない。彼女を庇えたことは良いことだし誇っていいことかもしれないが、それでも後悔が無いと言えば真っ赤な嘘になる。あのとき助けに入らなければと、もしものことを考えたのは1度や2度じゃない。こんなことを考えてしまう時点で自分の器の小ささが窺い知れるが、それでも自分なりに折り合いをつけて事故のことを忘れようと努力してたんだ。

「なのに、なんで」

呟きながら、涙を瞳いっぱいに内包した平沢さんの顔を思い出す。
とにもかくにも、さっきのことを謝ろう。今更だけど、男らしくしっかりと頭下げよう。そんでついでに本当に気にしなくていいということをわかってもらおう。
担任の先生の息子さんの自慢話を聞き流しながら、平沢さんの席を横目で確認する。早く先生の話終わんねぇかな。逸る気持ちを抑えよう。

きりーつ、れい、ありがとーございましたー！
ホームルームが終わると同時に俺は勢いよく席を立ち、平沢さんの席へと急いだ。

「平沢さん！……あのさっ、さっきの――――」

「ごめんなさいっ、私お姉ちゃんと待ち合わせしてるからっ！」

サヨウナラッ、と文字通り脱兎のごとく平沢さんは教室から飛び出してしまった。俺の顔を見るや否や速攻で逃げ出していった女の子を呼び止める隙もなく、俺は逃げられた方向に伸ばした情けない自分の手を空しく見つめた。
……ほんのちょっとぐらい話を聞いてくれてもバチは当たらないんじゃねえか？

「いきなりあの憂にナンパとかスゴイねぇ」

そんな惨めな俺に声をかけてくれた人がいた。

「憂ってば男子の人気高い上にガード硬いからアンタみたいな男じゃムリだと思うよ？」

そいつは自分の机に座ったまま面白そうにニシシと意地悪く笑いながら俺の顔を見ていた。クセの強い茶髪を両サイドで団子のようにまとめている快活そうな女子生徒だった。
確か、鈴木さんとかだったかな？先ほどのクラスの自己紹介でそう言っていた気がする。

「……」

ポッチャリくんといい、なんで皆は俺をナンパ野郎にしたがるのだろうか？

「さっきも言われたけどさ、俺ってそーんなチャラい男に見える？」

「うん、超見える」

「……そっスか」

俺は脱力したように平沢さんが座っていた席にぐにゃりと力なく座る。

「俺さ、さっきさ。平沢さんにちょっとひでぇコト言ったかも、しんない」

「うん、知ってるよ。さっきあたし憂たちのこと見てたもん」

なのにこんな絡みしてくるとはなかなかSな性格してやがんな。

「キミって平沢さんと仲いいん？」

「うん、そうだよ。あたし憂と同中だし」

俺は机に突っ伏しながら聞いてみる。

「なぁ、平沢さん、俺のコトなんか言ってた？」

「なーんも」

そうかい。
本格的に平沢さんは俺と関わりを持ちたくないんだろうか。
「……何見とん？」
「いやぁ、男子がフツーに落ち込んでるとか面白いなって」
「ひっでぇ」
アハハと笑いながら、鈴木さんは癖のある前髪をいじるように触った。
「鈴木さん、帰らんの？」
「アンタこそ帰らないの？」
そーな、と言いながら俺は立ち上がった。
愛用のデイバッグを担ぎ、杖を握った。
「じゃあ帰ろうや。家どっちら辺なん？」
俺がそう言うと、鈴木さんは少し驚いたように目を見開き、こちらを見てきた。
「ちょっとばっか俺の愚痴に付き合ってやってや」
「……別にいいケド」
こうして俺たちは教室を出て、並んで歩く。

まだ1日しか履いていない真っ白な上履きを靴箱に押し込み、履き古したスニーカーをポンコツの脚を乱暴に動かしてつっかける。

「ひょっとしてさー」

鈴木さんはローファーを履きづらそうに装着しながら、続ける。

「憂のこと庇って大怪我した男ってアンタなの？」

「ナニそれ？平沢さんがそう言ってたんか？」

「うん。去年の冬あたりだったかな？憂が事故りそうになったけどある男の子が助けてくれたって。私の所為で大怪我させちゃったって。……それってマジ？」

「美化されスギ。助けたっつーより、偶然そうなったってだけだよ」

「ふーん。……でも憂はきっとそう思ってるよ。そうじゃなきゃあんなに責任感じないでしょ」

「あーあーあー、あの子思い込み激っしぃのな」

「受験前の大事な時期なのに憂ってば落ち込みまくってホント大変だったんだから」

そら悪うござンしたね、と漏らしながらポケットに片手を突っ込んで茶化しながらポカポカ陽気あふれる桜並木を杖を突いて歩いていく。

雲一つない青空を見上げながら、俺はひそかに罪悪感を感じていたりした。

「気にせんでもいいのになぁ。でも、まさかこんなトコで再会するとは思ってなかったからこそのリアクションだった気がするよ。俺がこの町に引っ越して来なきゃ一生会わなかっただろうし」

「アンタって県外から来たんだ？」

少し前を歩いていた鈴木さんは意外そうにこちらを振り返った。

「おぉ、余所モンだぞ。自慢じゃないが、住み始めてもう2ヶ月だけどこの町で何度も迷子になってる」

「マジで自慢にならないからっ」

自分の方向オンチを自ら露呈してしまったので、強引に話を戻す。

「んなことはどうでもよくて！……平沢さんのことだよ」

「どうやったら愛しの憂と付き合えるかって？」

とか抜かしやがるのでドツいてやろうと腕を振り上げると、鈴木さんは悪戯っぽく笑いながら駆け足で逃げていく。

よく笑う子だなぁ、と半ば感心しながら薄目で鈴木さんを見ていると、彼女は横断歩道の前で急にくるりと体をこちらに向け、こう言った。

「で！……アンタはとどのつまり、どうしたいの？」

どうしたい？

「どうって……そりゃあ、さ」

どうしたいのだろう？

もう気にすんなって言いたいんだろうか。それともよくも俺の脚ぶっ壊してくれやがってと恨み言を言ってやりたいんだろうか。

それとも。

「———そうやってね、言いたいコト言えずにウジウジ我慢してるから憂に逃げられるんだと思うよ、アタシは」

容赦の欠片もねえオンナだ。

ブン殴られたみたいに、鈴木さんの遠慮ナシの直球の言葉が頭に響いた。

横断歩道の青信号がチカチカと点滅している。やがて信号は赤へと変わり、自動車が軽快に動き出した１０秒後。

俺は鈴木さんをまっすぐ見ながらこう言った。

「仲直りがしたいんだ」

口を突いて出た言葉に、俺は自分でもびっくりした。

「や、そもそも平沢さんと友達ですらねぇし、もう遅いかもだけど……。でも、仲直りっつか、ちゃんと謝りたい。せっかく気ぃ遣ってくれたのに八つ当たりしてゴメンって。そんでちゃんと話して、あの子に俺のこと嫌いにならないでほしいんだ」

もう2度と会いたくなかった子のはずなのに、気付いたらそんなコトを言っていた。

「ダメか、な？」

鈴木さんのまっすぐな瞳が俺のことを見ていた。
「ダメじゃないか聞いてみたら、……ねえ憂？」
「……え？」
鈴木さんが楽しそうにそう言った瞬間、俺はギョッと体を強張らせて恐る恐る振り向いた。
そこには――――
「平沢、さん……」
「謝るのは私の方です！仲直りしたいのは、私だよ……っ」
そこには、平沢さんが立っていた。泣きそうな顔で立っていた。
「い、いや、俺の方こそ――ってか、平沢さんいつからいたの！？」
「さっきのアンタの話は全部聞かれてるよ。たまたま憂の姿が見えたから、つい……ね？」
ついね、じゃねーよ！？ナニ渦中のド真ん中の人放り込んでんだよ！？
あんな思春期真っ只中の主張聞かれるなんて……恥ずかしずぎるっ。
鈴木さんは意地悪そうにニシシと笑いながら、そう言った。
「あの、私――――」

「ちょっと待ってや！」

口を開きかけた平沢さんの言葉を俺はムリヤリ遮る。

自分の顔面が熱を帯びているのがよくわかる。緊張からか歯の裏側がジンジン痺れてきた。

「さっきは怒鳴ってゴメンとか、事故の怪我のことは気にしなくていいとか、今度会ったら言おうと思ってたコトいっぱいあったけど。そんなことなんかより平沢さんに言いたい大事なコトあるんだ」

俺は照れながらも、勇気を出して言うことにした。

「仲直り、しよう」

妙に素直に言うことができた。

それはおそらく、そこにいるお節介なクラスメイトのおかげなんだろう。

「平沢さん？……泣いてんの？」

「仲直り、したいよ……っ！私も仲直りしたいっ」

平沢さんは俺の右手を、その小さな両掌でぎゅっと掴み、そう言ってくれた。

そして、とうとう彼女は嗚咽を漏らしながら泣き出してしまった。

「お、わっ！オイオイオイ、ナニもそんな泣かんでもいいだろ！？」

平沢さんに手を痛いほど握りしめられながら、あたふた狼狽していた俺はポケットからハンカチを取り出して押し付けるように泣き

じゃくっている平沢さんに渡す。
そして、そんなテンパっている俺と平沢さんを見守りながらニヤニヤ笑う鈴木さん。
平沢さんが泣き止んで俺の手を離してくれて、状況に収集がついたのは、信号が１０回は切り替わった頃だった。

「ぐすっ……、ごめんね。泣いちゃったりして」

鼻をすすりながら、ハンカチで涙をぬぐう平沢さん。

「それと、私も言いたいコトあるよ。大事なコト。……今までごめんねごめんねって謝ってばっかりだったけど」

一瞬、間を開けて。

「――――ありがとう。あの時、私のこと助けてくれて。仲直りしようって言ってくれてありがとうっ」

目と頬を赤くしながら、彼女はそう言った。
そう言ってくれたんだ。

「よろしく、これから仲良くしてね？」

「おっと、アタシも忘れちゃダメだよ！？」

言いながら、２人はこっちを見ている。

「あっ、そーだ！アンタの名前って――――」

「フユ」

俺はすぐに口を開く。

「冬助。みんなフユって呼んでるよ。２人もそう呼んだってや」

そう言って、俺は自然に素直に子供みたいに笑っていた。

こうして、俺たちは友達になった。

いつでも一緒にいて、笑ったり泣いたり怒ったり。
どうでもいいコトから大事なコトまで思い出と感情を共有して、
つるみ続ける。

――――いわゆる、親友というヤツだった。

第3話　友達を勇気づける方法

「軽音部？」

それは、とある昼休みのことだった。

「うん、そーだよ。私のお姉ちゃんが新歓ライブやるんだって！」

憂はまるで自分のことのように嬉しそうに、弁当をつまみながらそう言った。

「あーあーあー、例のお姉ちゃんね」

「はいはいはい、例のお姉ちゃんね」

机を寄せ合って一緒に昼食をとっていた俺と純は呆れながらそう言った。

知り合ってまだ間もないが分かったことがある。憂という人物を表現する中で1番合っているモノはシスコンだ。二言目には『お姉ちゃんがね――』『お姉ちゃんなら――』である。

憂はとても優しくしっかりしているが、どこか遠慮がちで1歩後ろ

に引いているフシがある。そんな彼女が最も感情的というかハイになって話すことが、１コ上の姉である。水たまりを見て、『お姉ちゃんコケないよね…』と過保護すぎな心配する憂を見て、俺と純は逆にそんな憂を心配したりする今日この頃。

「軽音部か。俺ン中学はなかったなぁ、そんなカッケー部活」

俺はコンビニのおにぎりをパクつきながら中学時代を思い返す。合唱部とか吹奏楽部とかならあったっけ。

「アタシらの中学もなかったよ。つーかマジカッコイイじゃん、バンドだよバンド！けっこう興味あったりするかも！」

と、息をまいて喋っている女子生徒は鈴木純。

彼女は賑やかだ。よく喋り、よく笑い、感情を溜めずに表に出すコトが多い。それ故に、人付き合いが上手いと思う。なんというか距離の取り方を心得ているんだろうな。そんな彼女のことを、俺は密かに尊敬していたりする。

「今日の放課後にでも行ってみない？軽音部。……あ、新歓ライブだっけ？」

「新歓ライブは明日だから今日は普通に部活やってると思うよ。私は行ってもいいけど、フユくんは？」

「あー、ごめん。今日バイトあるからムリっぽい。２人で見学してきてや」

「付き合い悪いよ、フユ。ちょっとぐらいイイじゃん」

「ダメです。……そもそもバイトしてっから部活入るつもりないし」
ちなみに2人は俺のコトをフユと呼んでくれている。憂はけっこう抵抗あったみたいだけど、最近はもう慣れてきたみたいだ。
「えー！？バイトばっかりしてると灰色の青春送るコトになるよアンタ」
「灰色とか言うなや！つーか憂も部活入らないって言ってなかった？」
「うーん……ご飯つくったり家事とかで忙しいから、部活やるのはちょっと難しいかな」
憂の両親は昔から仕事やら旅行やらで家を空けることが多いらしい。彼女の世話焼きな気質のルーツはそこなんだろうな。
「そっかー、フユも憂も部活やらないんだ……。なんかつまんないな」
そう言って、彼女は本当につまらなそうにパックのオレンジジュースを口に含んだ。
俺も純たちと一緒になにか部活動をやれたらすげー楽しいとは思うんだけど、バイトのせいで毎日部活に参加できないのだ。バイトは週に2、3日くらいなので、実際のところ部活をできなくもないのだが、毎日顔を出せないと中途半端な感じがしてイヤだ。……我ながら体育会系だよなぁ。
「とにかく今日はムリ！でも明日の新歓ライブはちゃんと見に行くよ、憂の姉ちゃん見てみたいしな」

「フユ、憂のお姉さんにナンパすんなよ？」

「え！？……フユくん、ホントのホントにだめだよ！」

「……」

「で、翌日の放課後になったワケだが、ナニか言うコトはあるか？裏切り者の純ちゃんよ」

「だから、ごめんって言ってるでしょ！裏切りとか言わないでよ！」

結論から言うと純は軽音部ではなく、ジャズ研究会に入部することとなった。昨日、軽音部の見学後にジャズ研に寄った際、とある先輩の演奏に一目惚れしてしまったらしい。

「すごくカッコいい先輩がいて、つい……。でもホントにごめんね、憂」

「気にしないでいいよ！しょうがないよ、どこに入るかは純ちゃんの自由なんだし」

別に悪いことをしたわけでもなんでもないのだが、純は申し訳なさそうにしている。

「ジャズっつうと、ディキシーランドジャズとかビックバンドジャズとか、そういうのか？」

「おー、フユ意外と詳しいじゃん、そんな感じのヤツだよ。この後先輩たちと相談して、新入部員でどんなジャンルのジャズやるか決めるんだ」

一転して、楽しそうに話し出す純。

自分に合った部活を見つけることができたコイツを、少し羨ましく思う。

「そっか。それじゃ頑張れよ、純」

「また明日ね、純ちゃん」

「ありがとっ、いってくるね！」

そう言うと、彼女は嬉しそうにジャズ研の部室に向かうため、意気揚々と教室から出て行った。

いってらっしゃいー、と憂は小さく手を振っている。

「……にしてもジャズね。まあ、アイツらしいって言えばアイツらしいか」

「純ちゃんがコンサートとかで演奏するの楽しみだね？」

「気ぃ早すぎだって」

今年の文化祭とかでやんのかな？とか考えながら、俺は席を立つ。

「じゃ、2人しかいねえけど、軽音部の応援にいきますか」

「うんっ」

杖を突きながらカコカコと歩いて教室から出ようとすると、隣で憂がナニかを見つけたように、あっ、と小さく声を上げた。

「ん？……あれ中野さん？」

俺がそう声を掛けると、ドアに手をかけていた中野さんはビクリと硬直してこちらを向いた。

「中野さん、今帰るトコ？」

「うん、冬助くんたちも？」

「や、俺らは――」

チラリと横目で憂を見てみると、なにか言いたそうに中野さんを見ている。憂が何を言いたいのか把握するのに1秒も要らなかった。

「あのさ、ちょっと頼みがあるんだ。今から軽音部の新歓ライブあるんだけど、中野さんも一緒に来てもらっていいか？憂の――こっちの平沢さんの姉ちゃんが出るんだって。俺らで応援したげようぜ」

「……私なんかが、付いて行っていいの？」

「悪かったら誘うワケないだろ。あ、そういや2人はほとんど初対面だっけか？」

中野さんと憂は少し緊張していたみたいだけど、同性だからなのかすぐに打ち解けたみたいだ。これからよろしくね、とハニカミながら話している2人を見て微笑ましくなっている俺だが、時間がかなりヤバイことに気付いた。

校舎から少し離れた場所にある講堂に着いたときには、すでに新歓ライブは始まっていた。脚を怪我している俺は歩くスピードがトロいので、2人には先に行ってもらいたかったんだけど、憂がそれを許すワケがなかった。

扉を開けて講堂内に入ると賑やかな音が大音量で飛び出してくる。ちょうど曲が終わるところで、時間的に1、2曲目だと思う。

「けっこう人いっぱいだー」

憂の言う通り、思ったよりも多くの人がこの新歓ライブを見に来ていた。独特の熱気の中、曲が終わり、新1年生たちの拍手が鳴り響く。

『どうもー、軽音部ですっ！えっと、新入生のみなさんご入学おめでとうございます！』

そう言ってMCを始めたギターを提げたその先輩は、なんだか初めて見た感じがしない。というか、隣にいる友達に滅茶苦茶似ていた。間違いなく憂の姉ちゃんだろう。

「あの人憂の姉ちゃんだろ？憂によく似てんね」

「うんっ、よく言われるんだ」

憂の耳に口を寄せて感想を言う。メガネを持ってくるのを忘れたのでハッキリとは見えないが、それでも似ている様子が見て取れる。憂と同じ栗色のショートボブヘアで、大きな目とか背格好とかそっくりだ。

『私、最初に軽音部って聞いてカルーい音楽だと思ってたんですよお。それで、カスタネットができればなーって思って、軽い気持ちで入部しました。なので、皆さんもそんな感じで気軽に入部してくださいっ』

……。

「……あの人憂の姉ちゃんだろ？憂とは似てないね」

「……うん、よく言われるんだ」

『それじゃあ聴いてください、わたしの恋はホッチキス！』

ひでぇ曲名だ、と感想を抱いた次の瞬間、演奏が始まった。力強いドラムが鳴り響き、それに合わせるようにギターやキーボードが呼応する。そんな賑やかな音をまとめるようにベースの重低音がリズムを縫っていく。

真剣に、でもどこか楽しそうに演奏する４人の先輩たちは、ナニかエネルギーのようなものを全開で放出していて、ひどくカッコよく俺の目に映っていた。

「すっげ……」

思わず素でそんな感想が出てきた。

その曲はまさにガールズバンドといった感じで、俺が普段聴いている音楽とは全くの別モノだった。だけど馴染みがないだけにとても新鮮に感じて、心地よかったのを覚えている。

憂の姉ちゃんの歌声を聴き入りながら憂を見ると、リズムに乗って楽しそうに手を叩き、憧れのお姉ちゃんを応援していた。中野さんは……。

中野さんは、その小さな体で目いっぱい背伸びをして、誰よりも真剣に演奏を聴いていた。プルプルと震えるように背伸びをして演奏を凝視する彼女はなんだかとても可笑しく、そして微笑ましかった。そんな彼女の様子に憂も気付き、俺たちは何故だか嬉しくなってクスリと笑う。

中野さんを連れてきてよかったな、と俺は思った。

結論から言うと、中野さんは軽音部に入部するコトとなった。
どうやら彼女もギターの腕に覚えがあるらしい。純とはまるきり反対で、ジャズ研はしっくりこなかったようだが、軽音部にはナニか感じるモノがあったらしい。

「緊張しすぎだっての」

「わっ、わかってるよっ」

新歓ライブの翌日、俺と憂と中野さんの3人は3階の音楽準備室――つまり軽音部の部室前にいた。
入部の意を軽音部の先輩たちに伝えるのだが、中野さんが妙に緊張しているので俺と憂で彼女の背中を押すコトにしたのだ。

「梓ちゃん、平気だよ！お姉ちゃんすっごく優しいから！ほら深呼

吸して」

息を吸って吐いてと深呼吸して平常心を取り戻そうとしている中野さん。憂も一緒になって深呼吸しているのがなんか可愛い。

「スッと行って、スッと入部届渡すだけだよ。落ち着け」

そう言ったとき、俺は妙な既視感を覚えた。前にもこんな感じが、ってかしょっちゅうあったぞ……？

その既視感の正体はすぐに分かった。バスケの試合でコートインする際の緊張でガチガチになってるチームメイトだった。男なら1発頭ドツいてビビってんなよ、と無神経な発破かけられるんだけど、さすがに女の子にそりゃできねぇわな。

「――――大丈夫だよ。なんかあったら、俺が力になるから」

我ながら凄まじく月並みな物言いだ……。

それでも、中野さんは少し驚いた顔をして、そしてゆっくりと肯いた。

音楽準備室に入っていく中野さんを俺たちは見送りながら手を振った。

「梓ちゃん、上手くいくといいね」

「心配性だなぁ」

とか言いつつ、俺も音楽準備室から目が離せない。

しかし、そんな心配は杞憂だった。しばらくすると、『確保ぉーーっっ！』と怒号が聞こえ、直後に中野さんの黄色い悲鳴が聞こえ、ガヤガヤと楽しそうな声が音楽準備室から漏れてくる。今頃先輩た

ちにもみくちゃにされているんだろう。

「憂、なんで笑ってんの？」

「そういうフユくんも笑ってるよ？」

「え、嘘、マジか？」

俺たちは音楽準備室を後にして、並んで帰路に着く。

「よかったね」

「ああ、よかったな」

一体全体ナニがよかったのかよくわからなかったけど、俺たちはガキみたいに笑ってよかったよかったと呟く。

「スーパー寄って帰ろうぜ。献立ナニにしようかなっと。……奥さん、今日はなんかお買い得な狙いドコありますか？」

「えっとですね、本日のオススメはですねー」

そんな馬鹿な雑談をしながら俺と憂は桜並木を歩いていく。

と、平和を実感している俺だが。
数日後、中野さんと軽音部のクセの強さを思い知らされることになるとは、まだ知らない。

第４話　楽しさ成分を補充する方法

朝起きる。
歯を磨く。
シャワーを浴びる。
朝食をつくる。
朝食をとる。
テレビを見る。

今日もスポーツニュースを見れなかった。
いつまで続くんだろうか？

時は放課後、俺・憂・純のいつものメンツな俺たちは駅前の喫茶店でいつものように駄弁っていた。ちなみに本日のジャズ研は機材点検だとかでお休みである。この春にオープンしたばかりのこの店はなかなかに小洒落ており、女性が好みそうなスイーツをウリに、平日にもかかわらず結構な賑わいを見せている。先日の休みに3人で買い物にいった際に発見し、ぜひまた来ようと話していた店である。

ちなみに俺は甘い食べ物は性別関係なくワリと好きな方だと自負していたが、やはり女の子の甘いもの好きにはかなわない。各々の注文したエッグタルトとティラミスを仲良く分け合いながら本当に嬉しそうに食べている憂と純を見て、おれはそう思った。

そんだけ美味そうに食ってもらえりゃお菓子も本望だろーな、と感想を抱きつつ自分のモンブランを食べようとしたが、突如乱入してきたフォークにその一部をかっさらわれてしまう。

「……食欲旺盛なんスね、純サンは」

「アンタみたいなお子様舌な男子には、この繊細な味はわかんないだろうからアタシが味わってあげてんの。フユは１０円くらいの駄

菓子で十分っしょ」

「どんだけ俺は舌バカなんだよ。つーか男が甘いの苦手だなんて、そりゃ偏見だろ偏見。俺は普通に昔っからスキだけどなぁ」

「はいはい女々しい女々しい」

「次からお前が肉食うたんびに雄々しいって言ったんぞコラ」

「はいはい聞こえない聞こえない」

「……太っても知らねえぞ？」

「女の子に対してイチバン言っちゃならないコトを……！つーかアタシ太ってないし、太らないし、毎日カロリー消費してるから大丈夫だしっ」

「まあそんな簡単にいけばこの世にダイエットなんてモン存在しねえわな」

「アタシに対してデリカシー無さすぎじゃない、フユ！？」

ちなみにこの間、憂はずっと苦笑いである。

いつも通りの世間話が続く。

「イキナリ小テストとかあり得ないってばーマジで不意打ち」

「安心してくれ。俺も全くできんかったワ」
「フユくん、アレは中学校で習ったトコだよ……？」
とか。
「最近お姉ちゃんが、私よりギターとお話ししてるコトが多い気がするの」
「大丈夫だって、お姉さんは憂の方がきっと好きだとあたしは思うよ？」
「いや、ギターに話しかける憂の姉ちゃんの異常さに突っ込めよっ！？」
とか。
「あ、そういえばあのドラマ今晩だったよね？」
「あーあーあー、あの超クソドラマな」
「先週見逃したからって拗ねんなよ、フユぅ？」
とか。
話は尽きない。そして、話題はジャズ研究会に移る。
「もー、指痛くてヤになっちゃうよ」
ホラ見て、と純は嬉しそうにマメだらけの左手を突きだしてくる。

「楽器弾くだけでこんなにマメできんのな。マジでソレ痛くねぇの？」

「痛い！けどフユは分かっちゃないね。このマメは初心者は避けては通れない道なんだよ。勲章だよクンショー」

「純ちゃんベース弾いてるんでしょ？カッコイイなー」

「イヤイヤ、まだまだだよー」

ここ最近、純はこの話ばっかりだ。よっぽどジャズ研が楽しいんだろう。やれ乙女の指にマメができた、やれ練習がキビしい、やれ先輩に褒められた、と部活のコトを話題に出す機会が多くなった。

それだけ楽しいってコトなんだろう、イイコトだぜ。

「純ちゃんが部活始めてからもう一週間が経つんだね、早いなぁ」

「もう一週間か。……あ。そういや憂、中野さんどうなん？ここ数日バタバタして中野さんと話せなかったけど、軽音部で上手くやってんの？姉ちゃんからなんか聞いてない？」

「あー、言ってたね。中野さんギター弾けるんでしょ？是非ウチに入って欲しかったぁ」

「えーと、ね……」

憂は歯切れ悪そうに口籠っている。

え、なんだそのリアクション？

「コレ言っていいのか分かんないけど。梓ちゃん今週から、一昨日

から部活にいってないみたいなの……」

……えっと。

「なんか偶然用事があっただけじゃないんか？」

「うん、それならいいんだけどね。お姉ちゃんがすっごく心配してたから」

先週はえらく楽しそうに部活の話してたんだけどなぁ、中野さん。情報通なポッチャリくん曰く、彼女はクソ真面目で部活とかサボるタイプじゃないらしいんだけど。

「ふーーーん……そりゃ、気になるな」

「あれぇ？フユってば、なんかえらく気になってんじゃん？まさか中野さんに……」

「あーあーあー、うっせーよ。ちょっと友達のコト心配しただけだろぉが！いらんお節介焼くつもりないよ」

しかししかし。

俺は翌日、いらんお節介を焼くコトとなる。

それは翌日のコトだった。

「風紀委員とか俺のキャラじゃねぇじゃんなぁ」

部活をやっていないヤツは必然的に委員会に入らされてしまう法則で俺も風紀委員に抜擢されてしまっていた。

委員会が終わり急いで帰宅しようと、教室に戻ると。

そこには、夕日の中たった一人で教室に残る中野さんがいた。

「よっす、こんな時間まで――――」

どうしてか、言葉が遮断される。

夕日でオレンジ色に染まった彼女は、一人で窓の外を見ていた。

あからさまに元気がない。

話しかけづらいのは重々承知しているけど、それでも俺は声をかけた。

「……どーしたん？」

「……んー、ちょっと休憩かな」

そう言って中野さんは力なく笑う。
その表情を見て、自分がそんな表情をしているときは恐らく一人にして欲しいときなんだろうなぁ、と思った。思ったのに、俺は何故か彼女の隣から動こうとは思わなかった。俺も同様に窓の外を眺める。野球部だろうか、サッカー部だろうか、ラクロス部だろうか、元気よく部活を行っている。

「……」

「……」

なんで軽音部行かねーの？と訊くべきだろうか？
それともナニも訊かずに普通に接するべきなんだろうか？

「あの、中野さんさ」

「……うん？」

「やっぱなんでもない」

「……うん」

き、気まずい……。
気まずさで文字通り息がつまりそうなっていると、突然アタマがブン殴られたかのように、ある言葉を思い出した。
『――そうやってね、言いたいコト言えずにウジウジ我慢してるから』

「逃げられるってかい……」

「え？」

「あのさ、軽音部でなんかあった？」

自然と、素直に訊くコトができた。

「我ながらさ。デリカシーねーなーって思うし、でしゃばっていらん世話焼くなよって思うよ。でもさ、そんなん関係ねーじゃんよ」

喋り出した舌が止まらない。彼女にとっては探られたくない腹なのかもしれないけど、関係ない。だって。

「だって、俺がそうしたいんだよ」

たまにはこういうのも悪くないだろ？

「なんで軽音部行かなくなっちゃったんだ？」

「それは……」

「言いたくないなら、言わんでいい。これ以上訊かんから。なんか美味いモンでも食って帰ろうぜ、奢ったる。……でも、話してくれるなら聞く。気の利いたコト言えねぇけど、最後まで聞くよ？」

「……なんか冬助くんって、変わってるね。学校の先生みたい」

うわぁ調子乗りすぎた、と顔を赤くしたが、後悔はない。

中野さんは学校の先生みたいな俺のコトを静かにクスクス笑い、そして少しずつ話してくれた。

軽音部は自分がイメージしていた部とは大分違ったコト。
先輩たちは優しいけれど、あまり練習に対して能動的でないコト。
外バンを組もうとライブハウスに行っても、どれも軽音部のように心に響かないコト。

ポツポツと喋りだし、そして徐々に熱くなって口が止まらなくなる。愚痴でも相談でもない、表現しにくいようなやるせない気持ちが、中野さんから伝わってくる。
そして、気付いたときには、彼女は泣き出していた。

「もう、わかんないよ……っ。どうして軽音部に入ろうと思ったのかっ、どうして新歓ライブの演奏にあんなに感動したのか……！」

嗚咽交じりで、溜めこんでいた感情を吐き出す。

「しばらく一緒になってやってみればわかると思ってたけど……け

どゼンゼンわかんなくて……っ！」

彼女はわかんないよ、と繰り返す。

そして、とうとう言ってしまった。

「――私、もう音楽続けられないよ……！」

その言葉を聞いた瞬間、俺は奇妙な感覚を覚えた。

ナンだ、そりゃ……？

胸の奥から湧き上がるこの感情。ソレはざわりと俺の感覚を支配していく。

窓の外のグラウンドから運動部らしき掛け声が漏れてくる、まるで別世界みたいだ。しばらく、中野さんの嗚咽と運動部の掛け声を聞きながら、考える。俺はなんて声をかけるべきか全くもってわからなかった。

「今から行こうぜ、軽音部」

だから思ったコトを口にした。

「へ？……だ、だって私――――」

「俺も一緒に行くから。前に言った『ナニかあったら力になる』っつうんはその場しのぎで言ったワケじゃねぇぞ？軽音部辞めるなら辞めるでソレでいい。言いにくいなら俺が辞めるっつったる。そんときゃ校外でバンドなりなんなり組みゃいいさ。中野さんがマジでバンド組めるまで俺が一緒に力になるよ。だから――――」

俺はなんでこんなムキになってんだ？

「自分の好きな音楽までヤメるなんて、悲しいコト言うな」

「……うん。で、でも今から？」

「そう。今から。今行けなかったら一生行けねぇよ、そんで一生後悔する。だから行こう」

席を立ち、強引に中野さんを連れ出す。

腹の底から湧き出すドロリとしたこの感情がなんなのか気付かないまま、俺たちは軽音部の部室へと向かった。

そして、この感情の正体に気付くコトになる。

「よし！じゃあ梓の為に演奏するか！その時の気持ちを思い出せるようにさっ」

軽音部の部長がそう言い、中野さんの為の演奏が始まった。

部室にて、俺のときと同様に泣き出してしまった中野さんを見て、軽音部の先輩たちは演奏を始める。それは、新歓ライブで中野さんが夢中になって聴いていた曲だった。

「やっぱり、私はこのメンバーとバンドするのが楽しいんだと思う。きっとみんなもそうで、だからいい演奏になるんだと思う！」

先輩の内のひとりが、中野さんに向かってそう言った。

「さあ、一緒にやろうっ。梓！」

そして、楽しそうに笑った。それに応えるように、中野さんも。

「はいっ！私……、やっぱり先輩方と演奏したいです！」

彼女も笑う。

吹っ切れたように。清々しく。

別の先輩に抱き着かれながらどことなく嬉しそうにする中野さんの笑顔を見た瞬間。

俺は唐突に、今自分の胸の中で渦巻いているドス黒い感情の正体に気付いた。

それは――

「あーあーあー、嫉妬かよコレ……」

そう、ソレは嫉妬だった。

彼女のチカラになるとか、手助けするとか、そんなんは全部建前で。

結局は彼女が羨ましかっただけなのだ。

――俺はもうできないのに

――お前は好きなコト好きなだけやれる癖に

――ずるい、卑怯だ

醜く、汚く、幼稚で、救いようの無いゴミみてぇな感情だった。

もう俺は必要ねぇな、と思った。事実、俺の役目はもう終わった。中野さんが軽音部に戻れてよかったじゃんかよ、と自分に言い聞かす。

楽しそうにしている中野さんたちに気付かれないように、俺は透明人間にでもなったような気持ちで部室から出ようとする。

明日にでも、勝手に帰ってゴメンなーとか適当にフォローすればいいだろう。

そして、進学の為に程々に勉強して毎日を過ごすのだろう。そこそこにバイトして、休日には憂や純に遊んでもらって。そんな毎日を過ごすのだろう。ソレって素晴らしいコトだろう？

コレでいいんだよな？

なんで自分にこんなコト言い聞かせてんだよ。

と、ドアノブに手をかけた瞬間――

「えええええ～～～っ！なんで帰っちゃうのぉ！？」

うるっせえ大声が部室に鳴り響き、思わず振り返る。

憂の姉ちゃんだった。

「あー……、えっと。なんで……って」

間の抜けたカン高い声を喰らって、俺硬直。

「あずにゃんと一緒に軽音部に入ってくれるじゃないの！？」

あー、そういうコトね。

「や、俺は中野さんの付き添いで入部希望とかじゃないんっスよ」

当然ながら部の勧誘をしてくるだろうと予想していたので、あらかじめ用意していた台詞を言う。

ようやく頭が再起動し始めて落ち着きを取り戻してきたが、中野さんがまた妙なコトを言い出した。

「え！？冬助くんも軽音部入ってくれるってコトだったんじゃないの？……あれ、え、違うの？」

……ナニソレ。

「前もさ、ちょっと言ったかもだけど、俺バイトやってるから部に入っても毎日顔だせないんだよ。だからやりたくてもムリなんだ」

「大丈夫っ！ウチは毎日出なくてもやっていけるよ！それより、まだ新入生はあずにゃんひとりだけだから、入部してくれると嬉しいな」

と、憂の姉ちゃん。

「…そもそも俺楽器なーんも弾けないですよ、バンドなんてやったコトないし」

「大丈夫っ！私がバッチリ教えてあげるからっ」

「……今ちょっと脚を怪我してまして。激しい動きとかできないんですよ、すいません」

「大丈夫っ！運動じゃないんだし、そんなに動かなくてもいいんだよっ？立って両手が動けばオーケイだよ！」

「……」

えーと。

用意していた言い訳を並べても次々と被せてくるなぁ、この人……。

そんでこのテの先輩が次に言ってくるコトもなんとなくわかってしまう。

「ねえ、今ナニかやってるコトとかやりたいコトあるの？」

ホラ来た。

「や、だからバイトあるし……」

シフトはほんの少ししか入ってねえのに？

「それに家事とか……」

嘘つけ、言うほどやってねえだろ？

「それに他にもイロイロ、たくさん……」

尻すぼみに小さくなっていく俺の声。炭酸の抜けたソーダみたいにスカスカの中身のない言葉だ。マジで格好悪い。

「俺は……」

「『楽しさ成分』が足りてないんだよ、きっと！」

……へ？なんだって？

「フッフッフ、知らないの？『楽しさ成分』があるとすっごい幸せになれるんだよっ」

憂の姉ちゃんが得意げにワケのわからないコトを言い始めた。

「顔見ればわかるよ、『楽しさ成分』が足りてないっ！……だからね」

全くもって不思議なコトに。

「だから、楽しいコトいっぱいしよう！」

何故だか、さっきまであった醜い気持ちはナリを潜めてしまっていた。

嫉妬心は一体全体ドコにいったんだ？

「バンド、楽しいよ」

そして、憂の姉ちゃんは笑った。１５年間生きてきて見たコトもない、特大の笑顔だった。

そのとき、俺は誰かに強い力で背中を押されたような気がした。スゲー強い追い風が俺のコトを後押ししてくれているかのような妙な感覚を覚えたんだ。

「バカッ、そんなに無理強いしたらダメだろ、唯っ」

別の先輩が焦ったように憂の姉ちゃんに抑制をかける。

「大丈夫だよ澪ちゃん。無理強いなんてしてないよー」

「いやだって、この人困ってるだろ？そんなムリに――――」

「憂の姉ちゃん」

「え？」

「……」

「……どうしたの？」

「……」

勇気出せよ。

「あのさ。俺にも、できるんか、な……？」

俺、今スゲー顔赤いんだろうなぁ。

「た、『楽しさ成分』……俺なんかでも、いっぱいになるかな？」

そんな俺を見て、彼女は何故かクスリと笑い、次第にソレは大きなモノになっていく。

「あっはははは！モッチロン！私がなんでも教えてあげるよー、先輩だからねっ！」

そう言って、彼女は誇らしげに胸を叩く。ソレは単純に先輩風を吹かしているだけなのかもしれないが、そのときの俺にはメチャクチャ心強く聞こえたんだ。

俺は、中野さんをダシにしたカタチになってゴメンな、といった気持ちで少し中野さんに罪悪感を覚えたが、気にせずに憂の姉ちゃんと向き合う。

周りに流されたワケじゃない。ハッキリと自分の意思で入部するって決めたんだ。

彼女のまっすぐな瞳を見ながら、これからお世話になる先輩たちに入部の意を伝えるんだ。

俺は気持ちを言葉にするために、大きく息を吸い込んだ。

もしも、あのとき。この先輩が、部室から出ていく俺を引き留めてくれなかったら。

俺は一体どんな毎日を送っていたのだろう。

引き留めて軽音部に誘ってくれた憂の姉ちゃんを、俺はいつまでもいつまでも感謝するコトになる。

俺が高校を卒業したとき、軽音部のおかげでどれだけの『楽しさ成分』を内包していたかなんて。

そんなの、言うまでもねぇだろ？

第5話　部活動での馴染む方法

「で、ナニか言うコトはあるか？裏切り者のフユくんよ」

「純、スマン。俺が悪かった。だから裏切りとか言わんでやってや！」

時は放課後。

俺が軽音楽部新入部員となった、翌日のコトだった。

「『俺はバイトあっから部活動ムリなんだわ～』とかー」

「うっ……」

「『いらんお節介焼くつもりないよ～』とかー」

「うぐ……っ」

「ドコのダレが言ってたっけなぁ？」

「あーあーあー、もう自分でも不自然だし、中野さんのケツ追っかけたカタチになったってわかってるってばさ！」

俺と純は各々の部活に行くために部室棟への道を並んで歩いている。
そんで、何故か俺は純から軽音部に入部したコトをネチネチと糾弾されているワケだ。
「でもさー、フユ。実際なんで軽音部入ったの？アンタそんなやる気でもなかったでしょ、どうして？」
「んー、なんかひとりヘンな先輩がいてさ」
「ん、先輩？」
「そんで……よくわからんけど」
「けど？」
「た、楽しさ成分……」
「へ？なんだって？」
「い、いや。なんでもない……っ」

「あら、フユくん。いらっしゃい」

「ムギ先輩、ちいっす」

部室に入った俺を出迎えてくれたのはムギ先輩だった。
この人の名前は琴吹紬。学年が1年上の軽音部のキーボード担当の先輩だ。おっとり系美人って感じで、実際性格もかなりおっとりしている。まだ会ったばかりでわからないけど、この部で一番包容力があるんじゃないかな。
余談だが、先輩たちはみんな俺のコトをアダ名で呼んでくれる。この部は随分、先輩後輩間の距離が近いみたいで、俺も先輩たちのコトは馴れ馴れしくも砕けたカタチで呼んでいる。

「あれ、ムギ先輩ひとりスか？他の先輩方は一緒じゃ？」

「りっちゃんと唯ちゃんはお掃除当番なの。澪ちゃんはもうすぐ来ると思うわ」

「中野さんも同じ理由で遅れるっつってました」

ちなみに俺は昨日入部したワケだが、昨日は俺の歓迎会というコトで放課後はずっと先輩たちと中野さんとこの部室でお茶を飲みながら話をして終わった。その際わかったコトだが軽音部の先輩たちはすげークセが強い。ムギ先輩は比較的マトモだと思うのだが、こ

の人もけっこう天然入ってたりして油断できない。平気で部室にティーセット持ち込むしな。変な部室だ。

「フユくん、紅茶でよかった？あ、コーヒーのほうがいい？」

「えっと、紅茶もらっていいですか？俺お子様舌なんでコーヒーをあんまり美味しく飲めないんですよ」

そんかしコーヒー牛乳とか大好きなんですけどっ、と笑いながら言う。まさに子供舌だ。

ムギ先輩はニコニコしながら俺のために紅茶を淹れてくれる。昨日飲んでマジでビビったが、ムギ先輩が淹れてくれる紅茶はすげぇ美味い。今まで飲んできたティーパックの紅茶はもう飲めないな。

「ブラックがどうもね、美味しく飲めないんですよ。ってそうだ、俺3つ下の妹いるんスけど、ソイツがアタマ沸いてんじゃねえかってぐらいブラックコーヒー飲みよるんですよ」

夏場の麦茶でもそんなに飲まねえだろってぐらいにカフェインを摂取する妹はもうナニ考えているのかわからん。

「フユくん、妹さんいるんだ。私一人っ子だから羨ましいな、姉妹兄弟がいたらどんなに素敵だろうってよく思うの」

「そんないいモンでもないですよー、ナッマイキだし」

4つ上の姉もいるのだが、妹以上のクセがある姉を紹介する気になれなかった。

「はい、どうぞ。冷めないうちね。お菓子もあるんだけどコレは

みんなが来てからにしましょうか」

ティーカップを俺に渡してくるムギ先輩が、あからさまに高級な洋菓子の紙袋を見せてくる。家から余ったモノを持ってきていると言っていたが、ムギ先輩はどうやらマジでご令嬢らしい。居るとこには居るモンだなぁ。

「あのねっ。ちょ、ちょっと訊きたいコトあるんだけど」

「ハイハイ、なんでしょう？」

「フユくんってアルバイトしてるんだよね？わ、私アルバイトにすっっごく興味あるの！」

唐突に鼻息を荒くしてコチラににじり寄ってくるムギ先輩。お嬢様の考えるコトはよくわからないけど、金銭目的ではなくバイトそのものに興味があるらしい。手段と目的が入れ替わっているが、バイトという庶民的な雰囲気がお嬢様のツボを刺激したのだろうか。

俺は駅前の喫茶店とバーを足して3で割ったような小さな店で働いている。ホール兼キッチンスタッフだが、脚が不自由なので混雑時は裏方に回るコトが多い。

ムギ先輩も1年前に1度だけバイトをしたコトがあるらしい。唯先輩の楽器代を稼ぐために部員全員で交通量調査の短期バイトをやったコトを楽しそうに話すムギ先輩。

しばらく2人でバイト談議で盛り上がっていると、部室にニギヤカな先輩2人がやって来た。

「おっすー、やっと掃除終わったぜぃ！」

勢いよくドアを開けて入ってきたのは田井中律先輩。ドラム担当にして軽音部の部長である。そのちっこい体のドコにそんなエネルギー詰まってんだよ、といった具合に激しく賑やかかつ豪快な先輩である。カチューシャで前髪を上げて快活そうなイメージを前面に押し出している。ちなみにれっきとしたオンナノコな。

「ムギちゃんムギちゃんっ、今日のお菓子ナニ～？」

律先輩に続いて部室に入ってきた人は唯先輩。
俺を軽音部に誘ってくれた先輩で、憂の姉ちゃんである。律先輩とはまた違ったベクトルで賑やかな人で、外見はよく似ているのに中身が憂と全くもって異なる仕様である。
２４時間ずっと笑っていそうなイメージだなぁ。ちなみにギター担当。

「おおっ？なんだなんだ～、フユお前ムギと二人っきりで変なコトしなかっただろうなぁ？」

「あー、俺さっきデートに誘ったら『顔がカブトムシみたいなヒトとは生理的にムリ』ってすっげえ冷めた眼で断られました……」

「ム、ムギ、お前なんてコトを……っ」

「私そんなコト言ってないっ！？」

なーんて、こんな茶番を打てるぐらいには律先輩とは仲良くなったつもりである。
本当に言わなくてもお分かりだろうが、ムギ先輩がそんなコト言っていたら俺は窓から身投げしている。

「ヘイ、フーちゃんっ！」

やたら上機嫌な唯先輩の声。ちなみにフーちゃんとは俺のコトである。

「フーちゃんっ？」

「はい？」

「フーちゃんフーちゃんっ！」

「はいはい？」

「えへへ、呼んでみただけ～」

「……」

クスリでもキメてきたのだろうか……？

唯先輩の天然はムギ先輩をも凌ぐぜ。

そんなこんなで４人でお茶を飲んでいると、残りの２人がやって来た。

「遅れてすいませんっ」

中野梓。俺のクラスメイトで、友達で、ギタリストで、泣き虫で、可愛い。

ある意味、唯先輩とは別に俺が軽音部に入るきっかけをつくってくれた感謝すべきお方である。彼女の熱狂的なファンであるポッチャリくん曰く、中学校時代はけっこうモテていたそうな、ウラヤマシイ。

「おっす中野さんおつかれ。……あ、澪先輩も。お疲れ様でーす」

そして澪先輩が微妙な顔つきで入室してきた。

秋山澪。ベース担当で、物静かな性格、スタイル良しの超美人。俺が昨日でわかったコトはこれだけである。なぜなら———

「そーいや澪先輩ってひとりだけみんなとクラス違うんでしたっけ？何してたんですか？」

「……ぁ、えっと……っ。ごめん、まぁ、ぃろぃろ……」

ドモるわ、声裏返るわ、視線泳ぎまくるわでマトモに会話できないのである。昨日も終始こんな感じで、あまり話を聞くコトができなかった。こんなキレーな人と話がしたいなんてのは当然だが、ソ

レ以前に同じ部の部員として上手くやっていきたいモンである。

「あ、あー喉乾いたなぁ！ムギっ、ミルクティー淹れてもらえるかな！？」

動揺を隠すように大声で話し出す澪先輩。

そして、頬を赤くして俺のコトを落ち着きなくチラチラと見ている。

……。

誤解の無いようキッパリハッキリ言っておくが、澪先輩は俺に恋をしていてそれで緊張のあまりついそっけない態度をとってしまうのだ。とかじゃねぇから！

逆に俺のコトが嫌いであんな態度をとっているワケでもないハズ。

……ない、ハズ。

「律先輩っ律先輩っ……。ちょっと」

「ん？どーしたフユ？」

俺たちは顔を寄せ合ってコソコソと秘密裏に話し出す。

「澪先輩が異性に全然耐性ないコトは重々承知しましたけど。ひょっとして昔オトコ関係でなんかトラウマとかあったんすか……？」

「お前がそう勘ぐるのもムリはないが、……澪は単っ純に男慣れしてないだけなんだ」

「最近の女子中学生だってもうちょい小マシな対応するでしょう！？」

「お前みたいに部活入ったばっかなのにもう部に馴染んでるような人見知りとは無縁なヤツにはわからんトコだよなぁ」

「ソレ部長にだけは言われたくねぇわ……」

「まぁ、でもクラスの男子とかにはもうちょっと普通なカンジでいるぞ、アイツは。少なくともあんなにテンパらないな」

「えー……。考えたくもないですけど、俺嫌われてる？」

「いや、そうじゃなくてさ。単純にコトが唐突だったし、部活でオトコと一緒になるなんてのはかなりイレギュラーなコトだからさ。アタシらだってそうだし」

「俺だって澪先輩と話すの緊張するんだけどなぁ」

「え？なんでよ？」

「だってあんなキレーな女の人と話すなんてメッチャ恥ずかしいじゃないですか！」

「……ほー」

「あ、律先輩もすげー綺麗な女性ですからね？」

「ばっ、馬鹿！とってつけたように言うなっ！」

「痛い痛いっ！？髪引っ張んなっ！」

第6話　愛器との出会う方法

そんなこんなで、軽音部総勢6名が揃った。

「で、だ！みんな会議を始めるぞ！コラ唯、お菓子ばっか食ってんなっ」

全員が席に着いて一息ついていると、いきなり律先輩が立ち上がってそう言った。

「ハイハイっ、りっちゃん隊長！いったい何の会議ですか？」

「良い質問だぞ、唯。議題は『新入部員フユをどう育てるか』だっ！」

……。

「要は部活においての俺の立ち位置、つまりバンドの担当楽器をナニにするかってコトでしょ？」

「いかにもっ。で、いくら素人って言っても興味のある楽器とかあるだろ？」

まぁ、軽音部に入るにあたって考えてこなかったワケではない。

「フユくん、キーボードはどうかしらっ？とっても似合うと思うの」
「バカ言えっ、フユはドラムに決まってんだろ！」
「フーちゃんは私が育てるよっ。ギターだってば！」
単純に自分の楽器をやらせたいのか、先輩たちはここぞとばかりに主張し始める。
「つーか、ひとつのバンドに同じ楽器が複数あってもいいもんなんですか？ギタリストとかは2人いてもおかしくないでしょうけど、実際のトコ音ゴチャゴチャになりません？」
この疑問は前々から思っていたコトだ。
「そんなコトないよ」
この素人丸出しの疑問に答えてくれたのは中野さん。ギター歴の長い彼女はイロイロと音楽知識が豊富なのだろう。
「確かに冬助くんの言う通りドラマーとかベーシストが複数いるロックバンドってのは珍しいよ。でもあくまで珍しいってだけで、ツインベースやツインドラム、ギタリストが3人だとか、逆にギタリストがいないなんて面白いロックバンドもあるんだよ」
「へぇ、思ったより枠に定まってなくてもいいんだな」
ギター3人とかレディへぐらいしか知らねぇぞ。
「とは言っても、やっぱりロックってジャンルに限るとメンバーが

多すぎると難しくなるかな」

ギター歴の長い彼女は音楽知識が豊富なのだろう。イロイロと知ってんなぁ。

「でもね、フーちゃん。ヨソのバンドがどうだとか、セオリーだとこうするとか気にしない方がいいよ。ウチはウチ、同じバンドなんてひとつもないんだよ？フーちゃんの思うままにすればいいと思うな」

「……おぉ。唯先輩、今スッゲー先輩っぽいコト言いましたね！」

「でしょでしょー？ホメてホメてっ」

「つーワケでそんな唯先輩に感銘を受けたので、唯先輩と同じギターやります」

「やったーっ、フーちゃんゲットぉ！！」

「て、テキトーだなぁ……。フユ、そんな簡単に決めてよかったのか？」

呆れた表情の律先輩。

「まあ、全くのノープランってワケでもないんですよ。唯先輩はボーカルも一緒にやりますよね、俺がギターやるコトで少しは先輩の負担減らせるかなと。それにギターの先輩は唯先輩だけじゃなくて中野さんもいる、他力本願で聞こえ悪いですけど技術教えてくれる先生は多い方がいいでしょう？」

「うん、私もソレでいいと思う。ギターパートがひとり増えるぐらいなら他のパートに悪影響しにくいだろうし。まだそっちのが作りやすい」

と、澪先輩。

「そっか、曲って澪先輩が作ってるんでしたよね？」

「い、いや私だけじゃないよ？ムギがいないとまず上手くいかないし。他の2人にも手伝ってもらってる」

「がんばってフユくん用のパート作ろうね、澪ちゃん」

にしてもたった1年でオリジナル何曲も作れちゃうってどうよ？音楽知識の浅い俺でもソレがいかにすげぇコトなのかわかる。マジで才能ある人たちなんかな。

「というコトで、めでたく我が部に3人目のギタリストが誕生した、みんな拍手！」

みんながお世辞抜きで嬉しそうに拍手してくれる。なんかこっ恥ずかしいなぁ。

「あ、でも本当に俺の脚でギター演奏できるかすげぇ不安です」

「昨日も言ったけど大丈夫だよ。ほら、ギー太貸したげる。提げてみなよっ？」

そう言って唯先輩は自分のレスポールを渡してくれた。コレがさんざん言ってた愛器ギー太くんね、ギターに名前付けるとかいかに

も唯先輩らしいや。

「おおっ？思ったより全然軽い！コレなら俺の脚でもイケそうです」

これまたなんか恥ずかしいな、一丁前にミュージシャンになった気分だ。

「ん？でもギタリストって足元でなんかカチャカチャやってませんか？」

唯先輩には俺が何のコト言っているか伝わらなかったみたいだ。ホラなんかあるじゃん、アクセルみたいにガシガシ踏むヤツだよ。

「ワウペダルっていうエフェクターの一種だよ。そんな力いらないし、絶対必要ってワケじゃないから気にしなくても大丈夫」

丁寧に答えてくれる中野さん。中野さんへの俺の信頼度が唯先輩へのソレと反比例するように上がっていく。実際中野さんの方がギターが上手らしい。唯先輩も高校から始めたんだっけな。

「でも冬助くん、去年の冬に怪我したって言ってたけどいつ頃には治るの？」

「あー、えっと、……まぁ年内には完治するんじゃね？」

ちなみにこの怪我が一生治らないコトは誰にも言っていないし、言うつもりもない。バスケをやっていたコトも絶対にバレないようにするつもりである。

言ったところでナニも変わらないし、腫物扱いされるのも同情されるのもゴメンだ。なにより憂がこのコトを知ったらどんな気分に

なるか。そんなん考えたくもない。

「憂ちゃん助けたっつー勲章だろ？似合わずカッコいいコトするじゃんよフユ」

「本当にウチの憂がお世話になりまして……」

「っていうこのくだり昨日さんっざん飽きるぐらいやっただろ！？もう勘弁してくださいっ」

「で、晴れてギタリストになったワケだが。フユ、お前ギター持ってんのか？」

「当然のごとく持ってないっスね。ココって一応音楽準備室なんだし、部の備品ってコトでボロい安物ギターとか貸してもらえませんか？」

「せっかくだし自分専用のギター買ったらどうだ？けっこう安く売ってるぜ」

「んー、そうすべきなんでしょうけど、あんまカタチから入るの好きじゃなくて。ギターに慣れて好みがはっきりしてから追々買いますよ」

「でもココにギターなんてないと思うぞ？あるんなら唯のギターはソレになってただろうし」

「マジっすか……、まぁ一応ソコの物置探してみますね。ひょっとしたらあるかもだし」

「あ。ちょ、ちょっと待てよっ！」

立ち上がって倉庫のドアに手をかける俺に律先輩から待ったがかかった。

「フユ。その中には多分無いんじゃないかなっ？そ、そんな気するって多分！」

「？ナニ言ってんスか、開けますよ」

ドアを開ける。

目の前にゴミ屋敷的風景が広がった。

「……」

……。

「……先輩らって自分の部屋で邪魔なモン押入れとかクローゼットに押し込むタイプだろ？」

「あ、アハハ……。自分の部屋はけっこう綺麗にしてる、かな？」

「あ！このぬいぐるみ私のー！」

「大半が律と唯の私物だろっ！」

澪先輩の言う通り、唯先輩と律先輩の所業っぽかった。

「うわぁ、マジでカオスだ……」

山のように積み上げられたダンボール、ＣＤに漫画本、音楽関連の雑誌や教科書、壊れかけたタンバリンやくちゃくちゃに絡まったシールドに針の折れたメトロノーム、恐らく先輩たちがゲーセンとかで獲ったであろうぬいぐるみの数々。

何とかスペースを見出してソレっぽいモノがないか根気強く探していると、部屋の奥に古雑誌の下敷きになっている銀色のケースを発見した。

「コレなんか楽器の入れ物っぽくないですか？」

そのケースを物置から引っ張り出して、部室に戻って開けてみる。

案の定、ソコには赤色のギターが収まっていた。

「かっけー。澪先輩、コレってＳＧってヤツ？」

「うん、ＳＧだな。けっこう古いギターみたいだけど……――ってフユ、ギターのコトわかるんだ？」

「や、大雑把な種類だけッス。唯先輩の持ってるヤツはレスポールだとか中野さんはムスタングだとか。メーカーとかもっと専門的なコトはさっぱりです」

「ふーん、そっか。音楽に携わってないと全然知らないって人多いけど、知ってる人は知ってるモノかな？」

ポソリと呟く澪先輩に、そんなもんスね、と俺も呟く。
特徴的な面白いボディをしているソレを、ゆっくりとケースから持ち上げる。

「うっわ、カビ臭ぇな……。コレ音楽室の備品ですかね？なんか誰かの私物っぽいんですけど」

「どうなんだろ？少なくともアタシらのモンじゃないよな？」

一同首を横に振る。
いったいダレのギターなんだろう？

「ひょっとして昔の軽音部の先輩の忘れモノだったりして？」

そう言ったムギ先輩に、ギター忘れる軽音部員って……、と返す中野さん。

「あら、懐かしいわねぇ。こんなトコにあったんだ」

いきなり後ろから女の人の声が割り込んでくる。
そこには眼鏡をかけた優しそうな若い女の先生が立っていた。

「え、このギターさわちゃんのだったの！？」

「ソレはあんまり使ってなかったんだけどね。……って、あら。アナタが新入部員のフユくん？」

「はい、そーですけど。えっと、ひょっとして顧問の？」

「ええ。初めまして、軽音部顧問の山中さわこです」

「どうも、これからお世話になりまっす」

「アナタのコトは今日りっちゃんたちから聞いてるわよ？梓ちゃんに続いてものすごくヘンな面白い男の子が入ったって」

入部翌日でソレってあんま嬉しくない評価だなぁ。礼儀正しい謙虚な1年坊くらい言っといてもバチ当たらんだろ？

「俺も先生のコトは部長からイロイロと伺ってます。ヘビメタ大好きで、キレるとヤンキーより怖くて、女性なのに歯ギターやらかす山中センセイですよね？」

「りっちゃーん、ちょぉっとこっち来なさい？」

「あわわっ。バカフユっ、ソレ言うなつったじゃん！？」

うはは、いい気味だぜ。

「へぇー、センセイ桜校のＯＧだったんですね、それも軽音部の」

山中センセイを交えて、再びお茶を淹れてブレイクし出す一同。
ホントにココは軽音部か？

「ちなみにコレが現役時代のさわちゃんです」

唯先輩が１枚の写真を取り出したので、俺と中野さんは興味津々でその写真を覗き込む。

「……」

「……」

なんか、デトロイトなんたらっっていうマンガにこういう感じの人いたよな……。

「その頃に使ってたってワケじゃないんだけど、こんなトコにあるとはねぇ」

懐かしそうにそのギターを手に取る山中センセイ。

「うっカビ臭っ……、それに何年も放っておいたからネック反っちゃってるかも……」

ギターを持ち上げて状態を確認する山中センセイ。

「フユくん、このギターを使ってあげてくれないかしら？」

「……ん、あれ？なんか押し付けられてる気がするのは俺だけ？」

「まあまあ、メンテに出せばまだ使えるかもしれないし。よかったらどう？」

「んー、でもいいんですか？コレ実際のトコ、けっこう高価なモノなんじゃないですか？」

「元々父親の友達から貰ったモノだし、……なによりちゃんと弾いてあげた方がこのギターも喜ぶと思うわよ。私はもうなかなか時間つくれないし」

「そ…っスね。じゃあ遠慮なくお借りしまっす」

「大事に使ってあげてね？」

「うん、大事にするよ。センセイありがとうっ」

俺がお礼を言うと、何故か山中センセイはおかしそうにクスリと笑った。

「な、なんかおかしかったですか？」

「いや違うのよ、ごめんごめん。唯ちゃんの言った通りだなって。……ちょっと照れ屋さんなのに、妙に素直でとってもイイコだって」

「うー……」

俺が照れ屋なんじゃなくて、こういうコトをストレートに言ってくる先輩や先生が異常なんだと思うけどなぁ。……まぁ赤面症だけどさ。

「とっ、とにかく！ありがたくこのＳＧ借りますからねっ！？」

「フーちゃん顔ちょっと赤いよ？」

「あーあーあー、ウッサイっすよっ。ギターがあってもアンプやらなんやら必要なモンあるでしょ？このギターがホントに使えんのかちゃんと診てもらいたいし、ここらへんで適当な楽器店教えてくださいっ」

誤魔化すように大きな声で唯先輩のからかいを遮る。

ホント天然はタチが悪ぃなっ。

「よーし、それじゃ今からお店に出発だ！みんな準備しろよっ」

「律先輩っ、部活しないんですか！？」

「まあまあ梓、コレも部活の一環だ」

「律……練習したくないだけだろ？」

「フユくん知ってる？ネギリをすると安くお買い物できるんだよ？」

「ムギちゃん値切りとっても上手だもんねぇ」

どうやら部活を切り上げてまで俺の買い物に全員で付き合ってくれるらしい。

結局のところ、みんな優しい人たちばっかりだ。

みんなが帰り支度をしてバタバタしている中、俺はケースに包まれたギターをゆっくりと覗く。

不思議な落ち着いた赤い光沢を放つボディにそっと手を触れ、優しく撫でる。

「ま、ポンコツ同士いっちょ仲良くしようや。これからよろしくな」

俺はニヤリと笑い、誰にも聞こえないほど小さな声で、そう呟く。

俺に合わせるように、ギターもニヤリと笑った。

そんな気がして、早く弾いてやりたいな、と強くそう思った。

第7話　澪先輩の壁を壊す方法

※顔文字、絵文字等は省略

ＴＯ：律先輩
ＳＵＢ：どーだった？Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ
ＴＥＸＴ：大げさでもなんでもなくマジで息がつまりそうだったんスからね！？俺がどんなに話題振っても澪先輩モゴモゴしてるし

ＴＯ：フユ
ＳＵＢ：どーだった？Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ
ＴＥＸＴ：アハハ、それメッチャ想像できる（笑）　まあ、学校から帰る方向がアタシらと一緒なコトを呪うんだな

ＴＯ：律先輩
ＳＵＢ：どーだった？Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ
ＴＥＸＴ：や、別にイヤってんじゃないですけどね。つーか、律先輩挟んで３人で帰るトコまでは澪先輩フツーにしてるんですよね、律先輩と別れて２人になった途端……

ＴＯ：フユ

ＳＵＢ：どーだった？Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ
ＴＥＸＴ：アイツもイロイロ困ってんだよ。お前が入部した日の晩なんて『リツ、どうしようどうしよう！？』って半泣きになりながら長電話されてホント大変だったんだからな？

ＴＯ：律先輩
ＳＵＢ：どーだった？Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ
ＴＥＸＴ：そ、そこまで……。前も訊きましたけど、昔なんかあったワケじゃないんでしょ？クラスの男子からイジメられてたりだとか、片思いの先輩にひでぇフラれ方したとか

ＴＯ：フユ
ＳＵＢ：どーだった？Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ
ＴＥＸＴ：そーいうわかりやすいのはないな。ただ、澪はモテる上にイジられ体質だし、小学校のときなんかは男子からよくちょっかいかけられてたよ。子供特有の屈折した愛情表現ってヤツ？

ＴＯ：律先輩
ＳＵＢ：どーだった？Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ
ＴＥＸＴ：なるほど、律先輩は澪先輩を守るためにそんな悪ガキを片っ端からボコボコにしてったんですね？スゲーなぁ

ＴＯ：フユ
ＳＵＢ：どーだった？Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：

Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ
ＴＥＸＴ：あたしゃ澪のＳＰかっ！？

ＴＯ：律先輩
ＳＵＢ：どーだった？Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ
ＴＥＸＴ：どっちかっつーと、澪先輩のヤンキーの彼氏って感じ（笑）

ＴＯ：フユ
ＳＵＢ：どーだった？Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ
ＴＥＸＴ：………ちなみに、だ！この際ハッキリ言っておくが澪はあくまで『部活の後輩』としてお前を気にしてるんであって、異性としては全くこれっぽっちも微塵も気にしてないからな！調子に乗って勘違いすんなよ？

ＴＯ：律先輩
ＳＵＢ：どーだった？Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ
ＴＥＸＴ：そこまでストレートに言わんでもいいだろ！？終いにゃ泣くぞコラ！

ＴＯ：フユ
ＳＵＢ：どーだった？Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ

ＴＥＸＴ：ま、そんなどうでもイイコトは置いといて。本題に入るぞ、ザ・フー聴いてみたか？どーだった？

ＴＯ：律先輩
ＳＵＢ：どーだった？Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ
ＴＥＸＴ：超強引に話題変えましたね……。って件名の『どーだった？』ってソレのことかい！？

指が痛い。

「ほらー冬助くん、音ビビってるよ！もっとちゃんとフレット押さえて！」

「おっす」

本格的に俺のギター練習が始まった。
放課後、いつもの部室で俺は中野さんにギターの基礎を教えてもらっている。澪先輩たちは曲のパートいじりに四苦八苦しているので全体練習ができないウチに、とここ数日中野さんにマンツーで鍛えてもらっているワケだ。
ちなみに唯先輩はあれだけ俺にギター教えると豪語していたが、俺に奥義（チャルメラ）を伝承してから飽きたらしく、中野さんに匙を投げたようだ。とんでもねぇ先輩である。
ちらりと横目で唯先輩を見てみると、お茶しながら楽しそうに律先輩と話し込んでいる。

「よそ見しないっ！集中しなきゃダメだよ」

そして、中野さんは意外とスパルタだった。けっこう怖い。

「中野センセイ……指すっげぇ痛いです」

「マメできるまでの辛抱だよ、誰もが通る道なんだから」

純も似たようなコト言ってたっけなぁ。
俺の左手の指は弦との摩擦で若干赤くなって腫れている。

「続けるよ？スローテンポでいいからＥＡＤＧの順にコードチェンジしてみて」

今練習しているのは、コードの練習である。決められたフレットの弦を押さえながらピッキングを行うという、ギターにおいて必須なのだそうだ。
メトロノームを使いながらおぼつかない指運びでジャカジャカとス

トロークを繰り返していく。ちなみに山中センセイから借りているこのギターは、先日メンテに出してみたところコレといって異常はなかった。思ったより保存状態が良かったらしい。

「じゃあ次はFね。ニガテ意識払拭して、がんばってやってみて」

「うわぁ、出たよF」

メジャーコード、マイナーコードで俺はこのコードが一番苦手だ。なんとかフレットを押さえていざ弾こうとしてもヘンテコなビビリ音がするだけだ。そんで指がすげぇツリそう。

「こんなんよくできるよなぁ、みんな」

「まぁFコードは初心者の壁って言われてるぐらいだからね。でも慣れると本当に簡単だよ」

「ホントかよー？……俺って指短ぇのかな？けっこう手ぇ大きい方だと思ってたんだけど」

「そんなのは甘えだよ。ほら、私なんてこんなに掌小っちゃいんだから」

そう言って、中野さんは右手を広げて見せる。確かに小さい。俺は中野さんの右手に合わせるように自分の左手をピタリとくっつけて、比べてみる。

「げぇ！？中野さんの手、こんなに小さいん！？……こんなんでよくあんなに指廻りまくれるなぁ」

「……っ」
「中野さん？」
手を離す。彼女は何故か顔を赤くして、自分の右手を見つめている。
「おーい、どしたん？」
「……な、なんでもないっ。ホラ練習続けてっ！」
「お、おぉ。なんでそんな慌ててんの？」
そのとき、挙動不審な中野さんの背後から唯先輩がにゅっと現れ、彼女に抱き着いた。
「なーにしてるの、あずにゃ～ん？」
「ひゃああっ！？唯先輩っ、いきなり抱き着かないでください！？」
神出鬼没な唯先輩は、中野さんのコトをあずにゃんと呼ぶ。……まぁちょっと猫っぽいけどさぁ。
こんなバカ騒ぎに便乗しようと律先輩もニヤニヤしながら近づいてくる。
……もうぜってぇ練習できねぇワ。
俺はギターを長椅子に立てかけ、そんな先輩たちと入れ替わるようにテーブルの方に近づいた。
「おつかれっす、ムギ先輩、澪先輩。アレンジの調子どうです？」

テーブルに散乱したＴＡＢ譜や楽譜とにらめっこしている２人に俺は声をかけた。
席に着き、すっかり冷めてしまった紅茶を煽る。
「ごめんねフユくん、まだもうちょっとかかりそうなの」
「いえいえ、むしろゆっくりやってくれた方が俺の基礎練時間が増えて嬉しいっていうか」
「フユくんすごいがんばってるね。ギターの才能あると思うわ」
「中野センセイと唯センセイの教え方がいいんじゃないかなぁ？」
「フフっ、そうかもね」
俺とムギ先輩がこんな風に話していても澪先輩は落ち着きなくソワソワしている。
「澪先輩も。俺の所為で全体練習できなくてすいません。それにそんな根詰めてやらんでも大丈夫ですからね？」
「あ、ああ。フユが気にするコトじゃないからっ。平気平気！」
そう言って、澪先輩はぎこちなく笑う。
澪先輩は俺に対して今みたいによく笑う。他のみんなに見せる笑顔とは全く違う、ムリしてつくった嘘の笑顔だ。
澪先輩は俺に気を遣ってくれている。
俺は、そんな風に澪先輩にこんな笑わせ方をさせてしまっている、そんな自分がひどく情けなかった。

「じゃあな、また明日っ。澪、フユ！」

帰り道、いつものように律先輩が別れの挨拶をする。

「あ、そうだ。……頑張れよ、フユぅ？」

「あーあーあー、うっせっ」

そう言って、律先輩は悪戯っぽく笑いながら家に入っていった。

……澪先輩と二人っきりだ。

「ん？フユ、頑張れってなんのコトなんだ？」

「あー、や、別に気にしなくていいですよ。しょーもないコトっす」

「？」

俺たちは2人で歩き出す。

カコカコと俺の突く杖の音がやけにクリアに聞こえてくる。

「すいませんね、歩く早さ合わせてもらって。フツーこういうのって逆じゃないッスか？男が女に合わすのが普通なのに」

「い、いや別にいいよ。私も歩くの遅いし……」

「へぇ、意外だなぁ。澪先輩、脚なげーから、なんか歩くの早そうな印象です」

「そ、そうかな？」

「そんで律先輩みたいに小っちゃい人は歩くの遅ぇイメージ。うはは、完全な偏見だけど」

「そ、そうか……」

「俺も怪我する前から歩くの遅かったから、大変なんですよ。朝、何回も遅刻しそうになったし。まぁ寝坊が原因なんですけどね」

「そ、そっか……」

「ええ、そうなんですよ……」

「うん……」

「……」

「……」

もう慣れっこだが、会話が止まってしまった。

うーん、どうしよっかな。

こないだ購買で澪先輩と間違えて話しかけたら全然知らないヒトでナンパと勘違いされて大恥かいたコト話してみようかな。それとも別の———

「ごめんな、フユ……」

「え？」

唐突にポツリと澪先輩が呟いた。

「自分でもわかってるんだ、このままじゃダメだって。せっかくフユは気を遣ってイロイロ話しかけてくれたりしてるのに……」

「澪先輩……」

「律たちみたいに自然に良い先輩でいれないんだ……」

「……」

「後輩にこんなに気を遣わせて、なのに自分はナニもできなくて……。私、先輩失格だ……っ」

俺だけじゃなかった。

相手に気を遣わせている自分を歯痒く思っていたのは、俺だけじゃなかったんだ。

俺と澪先輩は、同じコトで悩んでいたんだ。

「唯先輩なら、こーいうときなんて言うかなぁ？」

「……え？」

「『気にしないでいいよ』……は、なんか違いますよね、月並み過ぎる。うーん……」

「ふ、フユ？」

「『美味しいもの食べてゆっくり寝れば、きっと万事オーケーだよ』とか？……あー、言いそう。つーか絶対言うな、あの人なら言う言う」

「さっきからナニ言って———」

「唯先輩はすごいよな。言いたいコトを誰にでも好きなだけ言えて。感情に蓋せずに好きなように生きて。それでいて周りにいつも人がたくさんいて」

澪先輩が俺をじっと見ている。

「たくさんの人から、好きになってもらえる」

「……」

「たかだか出会って数日だけど、俺は唯先輩が羨ましい」

気付くと、俺も澪先輩も、足が止まっていた。

「そんで、そんな風に唯先輩のコト思ってるのは、多分俺だけじゃない。……澪先輩も一緒でしょう？」

「……うん、唯はすごい。私は、唯みたいになりたかった」

「でも、俺たちはどうやったって唯先輩にはなれないワケで。で、……えっと。ん？あれ？……結局ナニが言いたかったんだっけ？あれ、やべぇ……っ」

俺が話の着地点を見失ってワタワタと混乱していると。

「……ふふっ」

そんなテンパる俺を見て、澪先輩がクスクスと笑っていた。

……結果オーライ、か？

「とにかく俺が言いたかったんは……、俺と澪先輩ってちょっと似てんね」

「うんっ。私も今、同じコト思った」

「ま、ガンバリましょうよ」

「頑張るってナニを？」

「さぁ、なんスかね？」

「なんだ、そりゃ」

そう言って、俺たちは顔を見合わせて、おかしそうに笑った。

「あ、澪先輩っ。今度俺にベース教えてくださいよ、ベースっ」

「バーカ、フユはそれよりギター頑張らなきゃだろ？」

「じゃあ、約束っすよ？俺がみんなの足引っ張んないくらいにギター上手くなったら、ベース教えくださいね」

「ま、しょうがないな。そのときは私がフユのベースの師匠だからな」

澪先輩は、少し嬉しそうに、ニッコリと笑った。

ソレは今まで見てきた嘘の笑顔とは違う、とても素敵なモノだった。

ＴＯ：律先輩

SUB：やったぜ！Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re
TEXT：つーワケで、澪先輩いつか俺にベース教えてくれるって！マジで嬉しいなぁ！

TO：フユ
SUB：やったぜ！Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re
TEXT：お前、さっきからテンション高スギ

TO：律先輩
SUB：やったぜ！Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re
TEXT：なんスか、せっかく澪先輩の壁崩壊記念の報告なのに

TO：フユ
SUB：やったぜ！Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re
TEXT：ベルリンの壁崩壊記念みたいに言うなよっ！？

TO：律先輩
SUB：やったぜ！Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re
TEXT：いやー、ホントに嬉しい。あ、ソレに澪先輩初めてフツーに笑ってくれたし！

TO：フユ
SUB：やったぜ！Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re

Re：Re：Re：Re：Re
TEXT：……言っとくけどな、澪に手ぇ出したらブっっ殺スからな、ゴラァ！？

TO：律先輩
SUB：やったぜ！Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re
TEXT：えぇ？何キレてんの、この人……？

第8話　梓との距離を縮める方法

世間はゴールデンウィークだなんだと騒いでいるが、実際いかがなモノだろうか？
普段の土日のようにハッキリと短いワケでもなく、夏休みのようにガッツリと長いワケでもなく。中途半端な印象が否めないのは俺だけじゃないハズだ。誰だって学生、社会人、主婦共々同じコト思うハズさ。つまりさぁ。
ゴールデンウィーク短すぎだろ！もっと遊びてぇよっ！……である。

気が付くと、ゴールデンウィーク最終日になっていた。
憂たちと隣町まで行ってB級映画を観てきたり。
ポッチャリくんの家で他の男友達たちとオールナイトでウイイレ大会をしたり。
唯先輩の家で軽音部のみんなと鍋をしたり。
朝から晩までバイトしたり。
二輪の教習所に行ったり。
光陰矢の如しと言うが、あまりにも早すぎる。ゴールデンウィークが始まったのがつい昨日のように感じるのだ。

さて、泣いても笑ってもゴールデンウィークはあと1日。
どう過ごしてやろうかなぁ、と朝を迎えたのだが。
姉の部屋で、珍しいモノを発見した。

ＭｘＰｘのＴｈｅ　Ｂｒｏｋｅｎ　Ｂｏｎｅｓを流しながら時間を潰していると、待ち合わせの時間の５分前に、中野さんがやって来た。

「ごめーんっ冬助くん！待たせちゃった？」

「やーやー、俺もさっき来たトコだから。それよっかムリに付き合わして悪ぃね、中野さん」

イヤホンを外し、ｉＰｏｄをポケットに突っ込みながら応える。

「そ、そんなコトないよっ。私今日ヒマだったしっ」

駅前の広場でこんなやりとりをしている俺と中野さん、まるでこれからデートにでも赴くような風で個人的に非常に嬉しいのだが、残念ながらそんなハッピーな出来事ではない。

「そーいや、中野さんの私服初めて見るなぁ。すげー新鮮、似合っ

てんね」

こういうとき、『可愛いよ』とか『素敵だね』とかサラっと言えたらいいのだが、ガキ特有の青臭さが邪魔して言うコトができなかった。我ながらガキだよなぁ。

中野さんは、セーラーシャツに春らしいライトグリーンのカーディガンを小慣れた感じで着こなしていた。クロップドパンツからのびる脚先はハーフブーツでシックにまとめられている。小さな体にちょっとギャップがあるくらいの大きなトートバックが彼女の可愛さに拍車をかけていた。

……ハッキリ言って、超可愛かった。

「ありがとうっ。冬助くんも……か、かっこぃぃよ……っ」

中野さんがモゴモゴとナニか言った気がしたが、よく聞こえなかった。

ちなみに、野郎の格好なんてどぉでもいぃわ！という意見が多数だと思うが。俺はマリンカラーのボーダーにブルゾンを羽織っている。履き慣れたカーゴパンツにお気に入りのブーツスニーカーをつっかけ、背中にはケースに包まれた――――アコースティックギターを背負っていた。

「ソレが電話で言ってた冬助くんのお姉さんのアコギ？」

「おぉよ。姉ちゃんの部屋でさ……あー、ウチの姉ちゃんさ、一人暮らししてて、引っ越してからまだ1度もこの町の新しい家に帰ってきてないんだ。だから荷解きできてないダンボール山ほどあってさ、そんでソレ片づけとけとか言いやがるんだぜ？あのアホ姉は。そんでしぶしぶ荷解きしてたらこのアコギ発見したってワケよ」

「大学生なんだよね、冬助くんのお姉さん。でも、勝手に持ち出しちゃってよかったの？」

「ヘーキだよ。さっき電話して訊いてみたら持ってたコト自体忘れてやがったワ。そんで『ンなモンくれてやる』だってさ。アイツはコロコロ趣味変わるからなぁ」

よく言うと多趣味だし、悪く言うと熱しやすく冷めやすい。まあ、あの人はそんなコト一切気にしないんだろうけど。

「……ったく、ゴールデンウィークぐらい帰って来いっつうの」

「ふふっ、仲良いんだね、お姉さんと。なんかそんなカンジする」

「ドコが？あの人がちょっと普通と違うだけだよ」

俺たちは目的地に向かって歩き出す。

「で、せっかくだからこのアコギ使ってやろうと。そんで、状態どうなんだろうとか、弦ナニ使ったらいいんだろうとかわかんないコトいっぱいだったんで、俺のギターの師匠にご登場願ったって流れよ」

「なるほどなるほど。ところで純も言ってたけど、冬助くんって方向オンチなんだったよね？つまり『１０ＧＩＡ』までひとりで辿り着けるか不安だったと。なるほどなるほど」

「……ナ、ナニ言ってんすかナカノサン？」

「方向オンチだったと」

「ばっ、馬鹿言うなっ！方向オンチとかじゃなくて、コレはだな……。なんつーか、土地勘が人より芳しくないというか、地図が嫌いというか、なんというかだな」

「大丈夫だよ？ちゃんと私が連れてってあげるからね」

「だから、その子供あやすみたいな言い方ヤメテ！？」

「へへっ、やった。ピックおまけしてもらっちったよ」

１０ＧＩＡと呼ばれる近場の楽器店にて、用事はあっけなく終わった。前回の山中センセイのＳＧと同様にアコギをメンテに出し、中野さんオススメのアコギの弦を数セット購入し、ついでに弦を張り替えてもらった。

「冬助くんって、スグに誰とでも仲良くなるよね」
「や、あの店員さんはソレが仕事じゃんよ。俺がどうこうじゃなくてさ」
「そーかなぁ？」
なんて、話しながら店を出る。
「あ、そーいや、中野さん昼メシもう食った？まだなら奢るよ、付き合ってくれたお礼に」
「え？そんな、いいよ。悪いし」
「遠慮すんない。貴重な休日潰させてまで付き合わしてんだからさ」
なんだか、食欲を刺激する良い匂いが漂ってくる。商店街の屋台のタコス屋だった。中野さんとばっちり目が合い、即決。本場メキシコ仕込みと大それた売り文句の本格的なタコスを2人分購入し、その足で自販機へと向かう。
そして、俺たちは近くにある河川敷に陣取って腰を下ろすコトにした。このでっかい河なんていう名前なんだろう？
「今日は暖かいなぁ」
上着必要なかったな、と俺はブルゾンを脱ぐ。そーだねぇ、と中野さんもカーディガンを脱いで綺麗に畳み、トートバックに仕舞う。
河川敷にはちらほらと人の影が見える。川の向こうには釣りをしているオッサンがいるし、一家団欒の散歩をしている家族やキャッチボールをしている子供たちもいる。

中野さんにタコスと飲み物を渡し、俺たちは食べながらしばらくイロイロな話で盛り上がった。
お互いゴールデンウィークをどうやって過ごしたかとか。宿題をちゃんと終わらせたかとか。ゴールデンウィーク中に部活が1度しかなかったのは少ないよなとか。でも、その日の晩にみんなで食べた鍋すげー美味かったなとか。好きな音楽の話や最近のテレビの品評とか。しょーもない冗談を言い合って、互いに笑いあう。
恐らく中野さんと2人でこんな風にじっくりと話すのはコレが初めてで、だからこそ俺たちは食事が終わっても河川敷から動こうとせず、本当にイロイロなコトを話し合った。

「はー、なんか気持ちいいな。私、寝ちゃいそう」

そう言って、中野さんはごろんと河川敷に寝転がった。
俺も真似するように、ごろんと寝転がる。
話がひと段落し、少しの間静寂が訪れた。
太陽光を乱反射してキラキラと光る河面やゆっくりと流れる雲を見ながら、俺はのんびりとこう思った。

「あ。今すっげー時間がゆっくり流れてるなぁ。時速何キロぐらいだろ？」

「えー？時間なのに時速ってヘンだよ」

俺が何気なく言った言葉に対しておかしそうに笑う中野さん。

「まぁヘンだけどさ。でも、時間ってその場その場で進む速さが違う気するんだよな。遊んでて楽しい時だとスゴイ速くて、時速３００キロって感じ。逆につまんねぇ授業受けてる時なんてのは遅くなる、時速1メートルかな」

「あはは、なんかソレわかる。」
「で、今の時間の速さは。ヒトの歩く早さが時速約5キロだから……時速3キロぐらいかなぁ、今の時間は」
「なんか面白いね、確かにゆっくりだ」
「うん、落ち着く」
再び互いの声が途切れる。
「……なんか、俺。こーいうの、初めてかも」
「え？」
「俺さ、今までの人生すげー充実しててさ。でもどこか、体力っていうか精神っていうか、そんなんを削ってきた感じで余裕があんまりなかったんだよな。当然後悔なんかしてないし、むしろそんな風に戻りたいって思うけどさ」
河の傍で遊んでいる野球少年たちの楽しそうな声が聞こえてくる。
「でも、だから。こんなふーに、時間の速さが肌で感じ取れるくらい、贅沢に時間を使うの初めてなんだ」
ソレが良いコトなのか悪いコトなのかよくわからないけど。
悪くない気分だと、そう思った。
「私も。……高校入ってこんなにゆっくりしたの、初めてかも」

悪くないね、と彼女は呟き、うん、と俺も呟く。

「まぁ、今でも十分すぎるぐらい充実してるけどな！」

「そうだね。冬助くんはとりあえずもっとギター練習して、もっと上手くなってもらわないと」

「はい、そりゃもう中野センセイの弟子なんだから期待しててくださいよ」

俺の軽口に彼女はクスクス笑う。なんか猫みたいだなぁ。

あ、そーだ。俺はあるコトを思いつき、傍らに置いてあるアコギをギターから取り出す。

「中野センセイ、なんか1曲弾いてみせてや」

「え？や、ヤダよこんなトコでっ！恥ずかしいってばっ」

「いーじゃん、いーじゃん。弟子に見本みせてくれよ」

俺は手早く自分の耳を頼りに大雑把にチューニングを済ませ、強引にアコギとピックを中野さんに押し付ける。

中野さんは、仕方ないなぁ、と呟き、しぶしぶとアコギを構える。

「もうっ……。じゃあ、ちょっとだけだよ？」

じゃらん、とエレキギターとは全く違う生の音がギターから漏れてくる。

その曲は先輩たちが作った曲、『ふわふわ時間』だった。慣れな

いギターだというのに、そんなコトを微塵も感じさせない流麗な演奏だった。
演奏が終わる。ヒュウ、と口笛を吹きながら、俺は感嘆の拍手を送った。
「やっぱ、中野さんすげーなー！それにアコギだとこんなにも音が違うモンなんだな。面白いや」
「なんってったって生ギターだもん。本来のギターの音っていうのはこんな感じなんだよ」
確かにエフェクターとかで歪ませてるモンなぁ、エレキって。
「はい、冬助くん。見本みせたよ？次は弟子の番でしょ？」
と、少し意地悪そうに笑って、アコギをこちらに渡してくる。
「おぉ、やっぱそう来るか……」
余計なコト言わなきゃよかったか？
つっても、ふわふわ時間の俺のパートまだ出来てないじゃんすか。
「よーし、ならコレでいきまっす」
俺は結構簡単でちょっとだけ練習してみたあの曲をやってみるコトにした。
原曲のテンポよりトロいスローテンポだが、ゆっくりと単調なストロークを繰り返す。
「Ｄｅｓｍｏｎｄ　ｈａｓ　ａ　ｂａｒｒｏｗ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｍ

arket place ♪
Molly is the singer in a band ♪」

そして軽く息を吸って、アコギから流れるメロディと一緒に歌い始める。

「Desmond says to Molly girl I like your face ♪
And Molly says this as she takes him by the hand ♪」

体から妙な分泌液が出てきてるみたいに、不思議と気持ちがいい。

「Ob－La－Di ！Ob－La－Da！life goes on bra La la how the life goes on ♪
Ob－La－Di ！Ob－La－Da！life goes on bra La la how the life goes on ♪」

ジャカジャン、と最後だけカッコつけて弦をかき鳴らして演奏を終わらせる。

「ビートルズで、Hey jude の次に好きなんだよ、この曲」

思ったより大きな声で歌ったので周りの人たちがこっちを見ている。……恥ずかしい、調子に乗って歌うんじゃなかった。

中野さんを見ると、何故だか彼女はハトが豆鉄砲喰らったかのような呆けているのか驚いているのかよくわからない表情をしていた。

「で、どースか？中野センセイ？」

「ぎ……」

「ぎ？」

「ギターは下手くそ、でも……」

「……そっすか」

思わず、ショボーンとなる俺。

「い、いや、そんなコトよりもっ！」

「そんなコトとか言うなよっ、コレでも家でコツコツとギター練習してたんだぜ？」

「や、だからそうじゃなくてっ。……歌だよ歌っ」

「歌？」

「うん、すごいよ。なんか……言葉にできないけど、スゴイ！」

「そっちよりギター褒めてもらいたかったなぁ」

「歌すごいのにな……。まぁギターは練習するしかないよ」

「はーい、がんばります……」

そう言って、俺は拗ねるように再びごろんと寝転がる。
中野さんも続いて寝転がる。
なんかもうココから動ける気しねぇな。

「あーあーあー、もうナニもする気が起きん」
「ダメでしょ、冬助くん。まだ宿題全部終わってないじゃん」
「そーだけどさ、中野さんだって完璧じゃないだろ？数学の応用問題んトコ謎っつってたじゃんよ」
「うん、困った。どうしよう？」
「こりゃ、憂に教えてもらうしかねーなー」
「……ねえ、冬助くん」

若干トーンが低い声が聞こえる。体を起こすと、中野さんが神妙な面持ちでこちらを見ていた。

「あのさ、冬助くんって憂と……」

「ん？ナニ？」

「……」

「なんて？」

「だから……っ」

顔真っ赤で、挙動不審な中野さん。自分の手と俺へ視線が泳ぎまくっている。

なんだ？澪先輩のモノマネだろうか？

「憂がどしたん？」

「憂とさ、付き、あって、る……の？」

……へ？

「付き合ってるんじゃない、の？」

ひょっとして、周りから見たら俺と憂ってそんな感じなのだろうか？いや、ソレってけっこう嬉しくね？……って違う違う！

「や、憂とはそんなんじゃないよ。ただの友達って言うのはなんか

悔しいけど……、まぁ仲良い友達だよトモダチ」

「そ、そっか……。そうなんだ……」

そっかそっか、と安心したように繰り返す中野さん。

「あ！まさか、あの事故のコトで俺が憂にナニか脅迫してんじゃねえかって、憂を心配してんのかっ！？ひでぇなっ、俺そんなん絶対しねぇよ！」

「ち、違う違うっ！そうじゃなくて、……や、もういいデス、今言ったコト忘れて……っ！」

うーん……。時々だけど、中野さんマジでナニ考えてんのかわからんときあるよなぁ。

「憂はさ、かなりモテるし、俺なんてアウトオブ眼中だな。けど、友達としてなら仲良くしてくれる。事故のコト抜きにしたってね、構ってくれるワケよ。人と仲良くなりやすいっつうか」

「そこらへんさすがは唯先輩の妹って感じだよね」

「そう！俺もそう思う。……でもさ、人と仲良くなれるなれないとかじゃなくてさ、常に人と仲良くなりたいって思っときたいよ、当然のコトだけどさ」

「……うん」

「俺もそーだし、そっちだってそーだろ？」

俺の言葉に彼女が深く肯いた。

「冬助くんは――――」

「じゃあまず第一歩だな。コレ言うの何回目かわかんねぇけど。……『フユ』でいいよ」

「あ……」

「言っとくけど、呼ぶまでずっと言い続けるかんな？」

「……けっこー、ガンコだよね。『フユ』ってさ」

そう言って、彼女は笑った。

「まぁね、数少ない俺のセールスポイントさ」

なんてコトない、ほんの小さな些細なコトだけど。

やっぱり、俺は嬉しかった。

そんな俺の嬉しさが彼女にバレないように、そっぽ向きながら立ち上がる。ギターと上着と杖を引っ掴み、思いつく。

「よっし、今から憂ん家遊びに行こーぜ？」

「えぇ！？今から？」

「そう今から！少なくともダラけきった姉ちゃんがいるだろ？」

そして、俺はついつい子供のように笑ってしまう。

「行こうぜ、梓」

「……うんっ、フユ！」

梓もすげーイイ笑顔で笑ってくれたんだ。

互いが互いに近づこうって思えたなら。
ソレはとっても素晴らしいコトなワケで。
こうやって、少しずつ距離を縮められたらいいな、と俺は思った。

「あ、もしもし憂？今からヒマ？今さ、梓と2人でいてさあ———」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5147x/

けいおん！　大切なモノを見つける方法

2011年10月28日04時30分発行